

# グランドゼロ

GROUND  
ZERO JCF

89 秋

2011年9月26日 発行

- 福島原発事故被災者支援  
チェルノブイリからの学びを福島に繋ぐ！
- イラク支援  
第3回イラク医師招聘研修



眼差し、文字通り 秋の空のよう

そして その空は冷たく 火はない

その空は私を圧迫する 追いたてる

そんなふうに彼女は僕を愛する

さようなら 別れよう 許しを待つてはならない

すべてが日ごとにわかるようになる

胸は空虚で、前途は暗いということ

そんなふうに彼女は僕を愛する

ああ、僕は自分の道を行きたい

大事なものは 黙して取っておこう

だけど僕は隊列の中にいる年とった兵士のようにだ

そんなふうに彼女は僕を愛する

## 目次

福島原発被災者支援 チェルノブイリからの学びを 福島に繋ぐ！	福島の子もたちの命を守りたい 「ふくしまっ子の夏休み」 信州大学診察プロジェクト 原発震災から半年 辛抱強く思いやりのある東北の人々 放射能汚染に対してもっと怒りを！ 南相馬訪問 子どもたちを守るために 絆	<鎌田 實> 6 <神谷さだ子> 10 <加藤文典> 16 <廣浦 学> 20 <横山豊子> 22 <高村美春> 28 <遠藤清次> 30
第3回イラク医師招聘研修 信大の協力で充実の研修	第3回イラク医師招聘研修 イラク小児白血病治療のリーダー来日 信州大学附属病院の協力により充実した研修が終了 2011年度JCF通常総会	36 <加藤文典> 38 <神谷さだ子> 42
連載 & お知らせ	連載随筆「おのづから然り」 ベラルーシの食卓 モスクワ便り 振替用紙のメッセージから ありがとうございました！ 食品放射能検査機器を購入 Здравствуйте！（事務局広場） カルチャーレビュー インフォメーション	<宮尾 彰> 46 48 49 50 52 <宮ノ尾秀彦> 55 58 60 62

## 福島原発被災者支援

チェルノブイリからの学びを福島に繋ぐ！



信州大学医学部附属病院での診察

福島で子ども達を育てている親御さんたちの心労は、はかりしれない。子ども達に福島第一原発事故の影響がどうであるのか。わからない。大丈夫と言われても安心できない。福島の方達に寄り添う活動を検討している。

## 福島の子どもたちの 命を守りたい

鎌田 實 (JCF 理事長)



「ふくしまっ子の夏休み」で講演後、参加したお母さんと話す鎌田理事長

福島県内の小中学生の内、県外に転校した子どもが7600人。県内に転校した子が4500人。夏休み後にさらに1000人県外への転校が見込まれている。

色々な事情の中で県内の学校に残らざるを得ない子どもたちもいる。この子たちも守ってあげたいと思ってきた。

諏訪中央病院のある茅野市とカタログハウスが、「ふくしまっ子の夏休み」7泊8日の放射能疎開の旅をプレゼントした。白樺湖のホテルに4班にわかれて813人の母子

がやってきた。子どもたちは、魚つかみやプール、サッカー、小登山、花火大会などを十分楽しんだ。最終グループには、絵本作家のいせひでこさんから、震災後緊急出版された著書『木のあかちゃんズ』（平凡社）を百冊ご寄付いただいて、お母さん方に放射能と健康について講演をした時に届けた。みんな喜んでくれた。

15歳の女の子が、「大人になったら結婚して子どもを産む事ができるかとても心配だ」とほくに聞いてきた。ICRP（国際放射線防護委員会）は、妊娠の継続をやめた方が良いのは100ミリシーベルト以上の被曝をした時と言っている。福島市の女の子だったので、年間100ミリシーベルトを被曝する可能性はまずないから、結婚や妊娠に関して心配する事は無い。しかしICRPの基準値は「大甘」だなあと思いつつ、「あなたが大人になるまでに、僕たち大人の責任として何とか除染などの工夫をして、安心して子どもを生み育てられるようにしたいと思ってる」と伝えた。

一方、お母さんたちは、3月15日に福島市や郡山市の水が断水した時、水をもらうために給水車に並んでしまった。スーパリーにも買い物に行ってしまった。実は3月12日と3月15日と3月21日の3回、原子炉から放射性物質の大量の排出があった。

汚染地図が示すように、放射性物質が3回にわたって遠くまで飛んでいる事が、今になってわかってきた。政府も東電も十分な情報公開をしなかった。3月15日早朝に、東電の広報が福島第一原発にいるスタッフを全員撤退させると言い出した。これはあきらかに、メルトダウンを口では否定しながら、その可能性が大きい事を承知していたのだと思う。国民に対する、ひどい裏切り行為だ。

お母さんたちは何で教えてくれなかったのかと怒っていた。情報を開示してくれなかった事に対して、不満と不信感を持っているのだ。当然である。メルトダウンが起きたのかどうか、その時はわからなかったかもしれないが、間違いなく大変な事が起きつつある、それぐらいは政府も東電もわかっていたはず。

当時、福島市や郡山市はすでに放射線量が急激に高くなりだしており、リスクを回避するために屋内退避などを数日だけでも命じるべきだったと思われる。

JCFは、50人の子どもや妊婦さんにガラスバッジ(積算線量計)を貸し出した。毎月1回、蓄積の被曝量が明示される。原発から数キロメートルの所に放置していた車を許可を得て取り出し乗っていた人に、年間8ミリシーベルトの被曝の可能性がある数値が出て来た。車の除染をしなければいけないとアドバイスした。

生後3週間目の子どもに、年間6〜8ミリシーベルトの被曝の可能性が出たので、早速自宅に何い放射線量の測定を行った。できる範囲で除染作業のお手伝いをした。屋根や雨どい、溝、庭の土、草などが放射線量が高い事がわかってきた。家の中で、赤ちゃんのベッドの置かれている所が一番放射線の空間線量が高い事がわかった。赤ちゃんのベッドを動かすことで、被曝量を3分の1ぐらいに抑えられる事もわかった。ガラスバッジを貸し出した事が大きな貢献をしている。

ある3人家族にガラスバッジをつけてもらったところ、子どもの被曝量が一番多かった。生活パターンを調べて、子どもに外で遊ぶ時間を少し減らしてもらった。遊ぶ場所を限定したりする事によって、翌月には積算線量の低下が見られた。ジャカルタの日本人



ガラスバッジを付けている子どもの家の庭の線量を測った

会の方々からご寄付を頂いて、50台の空間線量計を買い、主婦の人達に貸し出す事にしました。自分たちの街の汚染地図を作り、自分たちの健康を守れるといいなと思っています。

ぼくは時々福島に入り、巡回診療をしている。さだまさしさんに協力してもらい、南相馬で講演会を行った。ピーコさんにも協力してもらい、田村市で講演とシャンソンのミニコンサートを行い慰問をした。いわき市でも、「放射能と健康」について講演をした。9月21日は、福島原発事故調査委員会委員長代理の柳田邦男先生、絵本作家のいせひでこさんと私の3人で、昼間は子ども達に絵本の読み聞かせの会、夜は千人のホールで、ボランティアの講演会をする事になっている。



除染のために取り除いた土は、集めてブルーシートをかけてある

南相馬市の医師会長の高橋亨平先生が、JCFの現地事務局を病院の中に作ってくれた。高橋先生が妊婦さんの家の除染活動を呼び掛けているので、JCFも協力をしている。

お母さんたちが子ども達の内部被曝の事を心配しているので、お母さんたちにレクチャーをしている。内部被曝を防ぐためには、放射性物質に汚染された食べ物を食べない事。そのためには、

- ・よく水洗いする事
- ・むける野菜はむく事
- ・茹でる事。セシウムは水に溶けているので、茹でて野菜の中に含まれている水分を外へ出してしまおうと一緒にセシウムも出て、野菜の放射性物質が減少する事がわかっている。

洗う、剥く、茹でる。この3点を丁寧にする事が大事だ。福島では、現在、川魚が汚染されている事がわかった。野菜は、福島県が調査しているデータなどを見ると、ND（不検出）か10ベクレル以下を示しているものが多い事がわかった。野菜の暫定規制値は500ベクレルであるが、ウクライナの暫定規制値は40以下。ウクライナの方が厳しいのである。飲料水も、日本のセシウムの暫定規制値は500であるが、ウクライナでは2である。牛乳も、日本

の暫定規制値は2000であるが、ウクライナでは1000。魚も、日本では5000であるが、ウクライナでは1500。風評被害を起こさないようにするためにはできるだけ低い方がよい。

JCFを応援してくれているカタログハウス東京店で、福島の野菜を売り始めた。日本の暫定規制値とウクライナでの暫定規制値を使って、この値以下の安全な野菜の販売をしている。計測して放射能が検出されないのならば、福島の野菜をできるだけ食べてあげる事も大事である。

子どもの命を守る為に、ウクライナでは幼児食品の基準が40ベクレル以下と規制値が作られている。日本では幼児食や果物の規制値がない。この二つは作った方がよいと思う。そして日本は「暫定」を止め、早く本格的な厳しい規制値を作った方がよいと思う。

長野県が、市町村や民間と協力し合って、約10000人の子どもたちに夏休みをプレゼントした。ピースボート、これに関してはぼくが個人的に応援を行った。南相馬市の中学生49人を学生ピースボートに乗せて、世界を見るお手伝いを行った。もちろん放射線疎開の意味もある。ベトナムでは同年輩の若者と交流をした。かつて枯葉剤をまかれ、障害のある子ども達も多い。

「環境を汚しては、人間は生きづらくなる」という事を勉強

した」と言ってくれた。

スリランカでは津波にあった若者と交流した。若い時期に世界を見ておくことは必ず人生に役立つと思う。

これから空間線量計の貸出しが行われる。食物の放射線量を測定できる機械を購入して、有効利用できないかと検討中である。できるだけ福島の子どもの命を守る活動を精力的に行って行きたいと思っている。

これからも厚い厚い支援をよろしくお願いいたします。



# 「ふくしまっ子の夏休み」

## 信州大学診察プロジェクト

神谷さだ子（JCF事務局長）



信州大学医学部附属病院小児科での診察

株式会社カタログハウスさんが、「ふくしまっ子の夏休み」を企画された。福島第一原発事故により外で遊べない子ども達に、夏休みにのびのびと自然の中で過ごしてもらい、子ども達の食べ物や環境放射線被害を心配する親御さん達にも、ゆっくり夏休みを過ごしてもらおうように、長野県茅野市と協力して、茅野市白樺湖・車山・蓼科周辺に計290組813人を福島県から招待した。JCFは、保養に来た子ども達の中から、第1、2、3期は被災証明書を持った方、夏休みが終わり人数が少なかつた第4期は全員から希望者を募り、信州大学医学部附属病院小児科で診察を受けてもらう事業を行った。

JCFが、ガラスバッジ（積算線量計）を配布したお子さん呼びかけて松本でのサマーキャンプ計画を進めようとした矢先、同じ時期に信州に福島の子どもとその保護者を招待するカタログハウスさんの企画を知った。それならば、JCFがチエルノブイリ以来行ってきた子ども達の健康を守る取り組みを、カタログハウスさんの今回の企画のオプシオンとして実施させてもらえないかと申し入れ、受けていただいた。カタログハウスのスタッフの皆さまには、茅野のホテルやペンションに散在している健康診断を希望する子ども家族と連絡を取ったり、その親子を診察当日何力所かの集合場所に集めて松本に向かうバスに乗っていただく手配をしていただいた。花火大会やお魚取りなど連日の保養プログラムをこなしつつ、JCFの申し入れに協力していただいたカタログハウスさんのスタッフの方々に深く感謝申し上げます。

バスの中で「20年間、チエルノブイリの子ども達を救おうと医療支援を中心に活動してきました」と挨拶をし、

信州大学医学部附属病院で行う診察の内容について説明した。

すると、お母さん達から声が上がった。

「今、福島県に住んでいて、これだけののかと悩んでいます」

「以前はなかったのに、鼻血が出るようになったんですよね。放射能の影響でしょうか？」

「チエルノブイリはどうだったんでしょうか。甲状腺のためにヨウ素剤を飲んでほうがよかったです」

「私と子どもは、東京都に避難したが、夫が仕事のために一人でいわき市に残っています。親と離れた生活は子どものためにもよくないので、戻りたい。でも、どうしたらいいか決心がつかない」

実際、事前の健康アンケートにも、

同様のお母さん達の心配と心のゆれが記されていた。

診察の合間にも、子どもの内部被曝を心配する声が多かった。

「夫は、原発で働いているんです。3月1日から1週間は、まったく連絡がつかなくて、私達も避難したらいいのか、どこへ行けばいいのか、本当に困りました。ようやく電話が繋がった時、早く帰ってきて、と懇願したの。だけど、俺達がやらなくて誰が原発止めるんだと言つて、ずっと帰らないんですよ」

福島第一原発のある双葉町には、原発で働いている人が大勢いた。収束の見通しがない今も、彼らが十分な食料と睡眠を保障されているのか、被曝対策はきちんとされているのだろうか。と、家族を目の前にして胸が苦しくなる。

お父さんやお母さんの心配をよそ



診察の前に松本城の近くで食事、松本城も見ました

に、子どもたちは、くったくがない。採血されるのをいやがり、1時間以上、採血室の前で口を真一文字に結び、「いやだ、いやだ」を繰り返していた子。お母さんは、せつかくの機会だから検査を受けさせたい。「泣いてもいいんだよ、終わったらアイスクリームを買ってあげるよ」と促すが、頑としてきかない。説得の果てに、最後の最後に採血が終わって一言、「がまんして

受診者数	130名
------	------

症状（複数重複あり）	
頭痛	15%
腹痛	15%
鼻出血	12%
不眠・精神的な不安定	20%

検査結果	
明らかな甲状腺疾患	0%
甲状腺の明らかな異常ではないが経過観察を要する	7.7%

「損しちゃった」。

小児科のお医者さん達は、医局をあげて取り組んでくださった。看護師さんたちも、怖がる子ども達を上手にやさしながら採血してくださった。医事課の受付手配も非常に速やかに順調に進んだ。

JCFの診察プロジェクトは、さまざまな不測の事態にあいながらも、無事終了した。全体の結果は次の表のようにならった。



信州大学医学部附属病院での診察

今後は、地元の福島県内でもこのような検診ができるよう、準備を進めている。

福島県と福島県立医大は、18才以下の県民36万人に対して、3年間かけて超音波検査をする計画を発表した。しかし、3年のスパンは長すぎないだろうか。カタログハウスさんと協力し、

信州大学で行ったような早期検診を福島の子ども達に受けてもらえるように体制を整えていくことになった。

8月末、再び福島に戻ったお母さんから、JCFにお手紙が何通か届いた。

☆JCFボランティアの皆さま

「ふくしまっ子の夏休み」では大変お世話になりました。

私の息子は、まだ2才7カ月で、信州大学医学部附属病院で健康診断の日、鼻水に熱がありました。その上、天気も雨という状態でした。仲良しのママ友が側にいるわけでもなく、宿も息子と二人の部屋を希望していたので、周りの方ともあまり話はしませんでした。

そんな中、12キロある息子を抱っこし、傘をさし、荷物を持って歩くには、身体に負担がありました。でも、JCFの方の温かい声かけに、思わず涙し



信州大学医学部附属病院での診察

てしまいました。不安と緊張と疲れと、いろいろな事が、一気にあふれてきてしまい、JCFの方には申し訳なく思います。

でも、それをきっかけに、病院での検査も無事できて、カゼ薬もいただけました。待ち時間には、風船で犬を作っていたいたり、私がいろいろ走り

回っている間、息子を面倒見ていただったり、と本当に助かりました。

あの時、改めて一人じゃないんだなと思えました。ありがとうございました。

福島県郡山に戻り、また、マスクをつけないと外出できない日々が続きます。それでも、楽しく、すてきな思い出ができました。そんな事を励みに頑張りたいと思います。

☆今回の検査で、3才児・0才児の貧血を見つけていただき、感謝しております。

0才児は特にひどかったのですが、いわき市内の病院で薬をいただいて、治療中です。その先生が、信州大が母校だということで、不思議なご縁を感じます。遠くの他人が心配し、活動してくださいと励ましてくださる事が、私達の力や励みになりました。ありがとうございました。



診察の待ち時間は、ボランティアさんに遊んでもらいました

☆先日「ふくしまっ子の夏休み」信州大学診察」の際は、大変お世話になりました、ありがとうございました。

第3期の診察の際、前日の急な申し出にもかかわらず、快く診察に参加させていただきましたこと、また、中山先生のご連絡に動揺し、神谷様にお電話した私を励ましてくださったこと、今も心より感謝しております。

中山先生と後日お話ししましたところ、三男のサイログロブリンの数値が高いということでした。いわきに戻り、検査の結果を持って受診いたしました。エコー検査を行いました。腫瘍らしきものは見られないので、今後経過を観察していくということになりました。

中山先生からのご連絡の際には、ひじょうに動揺いたしました。現在三男に腫瘍が見られないこと、そして何より、神谷様に「これで終わりにしませんから。私達が支えますから」と言っていたいただきましたことで、平常心を保ち、毎日の生活を送っているところです。

今後子ども達の健康を第一に考え、親として何をしてやれるかを日々自問自答しながら生きていきたいと思っております。

お手紙の言葉の端々から、福島のお母さん達の、子どもの被曝による健康被害への不安をひしひしと感じ、今後も引き続きできる限り丁寧なフォローをしていきたいと決意を新たにしている。



採血も平気、ニコニコの子もいました

## 福島の子どもたちの検診結果

信州大学医学部小児科外来にて、7月28日・8月4日・18日・25日に警戒区域・計画的避難区域からの子どもたちを中心に希望者130人が診察を受けた。

頭痛・腹痛の症状に対しては、風邪などの原因以外には、内科的機能疾患は認められなかった。3月11日以降、鼻血が何度も出る子が15人いた。鼻の粘膜が傷つきやすいアレルギー性鼻炎でもなく、血小板の異常もみられなかった。

血液生化学検査で、甲状腺ホルモンについて調べた。そのうち、今後経過観察が必要な子が10人だった。甲状腺ホルモン基準値以下が1名、甲状腺刺激ホルモン基準値以上が7名、サイログロブリン基準値以上が2名いた。サイログロブリンは、甲状腺がん・バセ

ドウ病・甲状腺炎で、甲状腺の被膜が破れ、出てくるものである。また、何らかの理由で、組織が壊れやすくなっており、自己抗体として、異常が起ると修復しようとしている可能性もある。

1人は、福島に戻り、すぐに超音波検査を受け、がんではない事がわかった。

3月11日から2週間の政府の避難指示対応が非常に悪かった。放射性ヨウ素によって、甲状腺がアタックを受けないように、安定ヨウ素剤を飲むように指示もされていない。福島県と福島医大で行なおうと計画している健康診断だけでフォローできるか心配だ。

長野県に呼ぶのもたいへんなので、福島できめ細やかな検診が受けられるように体制を組んでいきたいと思っている。



# 原発震災から半年

加藤 丈典



ガラスバッジの報告をする加藤さん（右端）

3・11から半年が経過し、JCFは現在ガラスバッジ（積算線量計）を用いた妊婦、幼児の線量モニタリングを行っている。月ごとの積算被曝線量をチェックし、線量を低くするためにどうすれば良いのかを、現地で留まって医療を続ける南相馬市中央産婦人科の高橋先生と相談しながらアドバイスしている。数は50個と非常に限られており、人出不足があることも否めないが、なんとか3回目のサイクル

を終えた。

南相馬市で主に配布しているが、同じ南相馬市内でも山側、中心部、海側で値がだいぶ変わる事がわかってきた。高いところでは年間6ミリシーベルト（mSv）、低いところでは年間1mSvにも満たなかったりする。高線量地域に住んでいて、様々な理由で遠方への避難が難しい方には、市内での引越しや、一日のうち数時間でも線量の低い地域で過ごすように推奨している。バッジはデータの収集ではなく、あくまでも被曝線量の軽減が目的だ。中には出た値を機に避難を考える妊婦さんも出てきているが、こういった決断を下すところに立ち会うのは非常に辛いものがある。

チエルノブイリ、イラク、そして福島と、原発問題や放射汚染に関わってきたが、最近になって自分のルーツにもこうした問題が深く関わっていたことを改めて思い出した。私は石川県の能登半島の最北端にある珠洲市というところの出身だ。現在の市の人口は1万8千人程度で、行政区分として市を名乗るにはあまりにも人口の少ない町だ。事実、本州でも最も人口が少ない市なのだそう。豊かな海や山に囲まれているが、雇用機会が極端に少なく若者の流出による過疎化は進むばかりだ。こういうところは「びっ

たり」だったのである。何に「びったり」だったかという  
と原発立地候補にである。周囲は海で人がおらず、陸地は  
過疎化で人がおらず、かつ雇用対策も採れるとあらば、弱  
小自治体が原発誘致というアイデアに飛びつくことは想像  
に難くない。高屋町小浦出と三崎町時家に建設計画が浮上  
したのは1975年。そしてこの計画が正式に頓挫したの  
が2003年。実に28年にも及ぶ長い期間、私の故郷は原  
発問題に揺れた。

私自身、幼少時にまちを真つ二つに割った原発問題のこ  
とをよく覚えている。実は私の大叔父は当時、原発推進派  
の市議会議長であり、私の家族も彼の選挙運動を手伝った  
りしていた。当時は大人達のいう「ゲンバツ」がなんのこ  
とかよく分からなかったが、三崎町の漁師や地区労の人達  
が行っていた座り込みのデモが実家のすぐ裏にある市役所  
で行われていたので、「ゲンバツ」を巡る大人達の空気が  
異様なものだということは敏感に感じ取っていたと思う。  
その証拠にこんなことがあった。

この問題が最も激しくなった1993年の市長選挙の時  
の事。選挙では原発反対派として擁立された候補が、当時  
私が教わっていた社会の先生だったこともあって学校の中  
も騒がしくなった。子どもは大人のことをよく見るものだ

と今さらながら思うが、私のクラスでは大人の真似をした  
「選挙っこ」遊びが流行った。休み時間に政治家の演説  
の真似ごとをしたり、なんのこともよくわからないまま、  
「はないちもんめ」のように子ども同士が分かれて「お前  
ら推進派はあだだ！」「お前ら反対派こそこうだ！」など  
と言いつつ合うという、ただそれだけの遊びなのだが、とても  
盛り上がったので選挙期間中ずっと続いた。しかしある時、  
隣のクラスの教師が突然教室に入ってきて「なんもわから  
んがに、そんなことやるなまつ!!」と一喝されて以来、そ  
れきりになった。

もう少し当時の話を続けたい。実はこの選挙、原発に  
焦点を当てた市長選としては3度目にあたるのだが、強  
引な誘致政策や安全性に疑問を投げかける声が多くなり、  
反対運動も盛り上がりを見せていた最中に行われた選挙  
だった。これまで推進派が多かったがここへきて町は完全  
に二つに割れた。結果は推進派が9199票、反対派が  
8241票。僅差であったが推進派が勝利に終わった。と  
思われたが、開票後に投票総数が投票者よりも多いとい  
うことが判明した。推進派による増票工作が行われていたこ  
とが明らかになったのだ。

しかし選挙の違法性を求める訴えは、推進派市長が当選  
してから3年後になってようやく認められた。市長は失脚

した。その直後に行われたやり直し選挙も新たに擁立された推進派後継者が勝利したのだが、実はこの選挙も市役所ぐるみで推進派の応援を行った公職選挙法違反であったことが判明し、これに関わった助役が逮捕されるに至った。反対派の必死の抵抗運動はその後も続き、2003年に北陸電力らが「珠洲原発凍結の申し入れ」を行い白紙撤回されるまで、当初から数えて28年間も続いたのである。

こうした運動を担ったのは、腰が曲がった漁師や農家などの古老の人々である。本当に頭が下がる思いだ。珠洲の原発運動は、このような経緯からみて解るように、地方政治における不正と闘った民主化運動だったと言われる。しかし当然ながら、原発推進派がこうした動きをするのは、何も珠洲に限ったことではないだろう。

少し時間を戻す。3・11の前、まだイラクにいた頃、チュニジア、エジプトに端を発したジャスミン革命の波を目の当たりにして、とんでもないことが起こったと思ひ驚いた。彼らの運動の狙いは、各国に長年君臨してきた独裁体制の崩壊だった。イラクでは、「日本は民主主義の国」だなんてことを本当によく言われていたものだった。中東全土に波及したような急進的な革命は行われぬものだと思われていたし、ある程度はそう自分も思っていた。しかし3・

11以降、イラクで顔を上げて歩けないくらいの情けなさと羞恥を味わった。原発事故をきっかけに日本の民主主義の脆弱性を痛感したためだ。一つは巨大権構造が市民を欺こうとすること。原発はその誘致から、調査、建設、運営、そして今回のような緊急事態と、すべてのプロセスにおいて嘘がつきまとう。「自治体が潤いますよ」「地盤は安全ですよ」「発電コストは安いですよ」「メルトダウンはしません」「万全に万全を期して……」。

もう一つは市民による看過だ。個人的に原発事故は人災だと思っているが、あくまで、市民が原発行政をきちんと監視、注視してこなかったネグレクトという意味で、人災だということだ。反対運動は地域、局所的な枠に押し込められ、反対の声を上げてもらえず、呆然とたたずむしかなかった人がどれほどいたか。3・11以降、日本でもジャスミン革命が起こりつつあると思う、それは軍事独裁体制の崩壊を望むものではない。強大な権構造に対抗する民主化運動だ。

28年という歳月をかけて戦った珠洲原発運動のおかげで、今も私は故郷に帰る事ができる。祭礼に火が灯るのをみたり、揚浜塩田という古来の塩づくりが行われたりする

のをみると、当時は幼くて何もわからなかったが、今は、当時反対運動に身をささげた人々に対する感謝の念を禁じ得ない。今、日本各地で起こる反原発運動が実を結ぶことができれば、「故郷を残すために戦ってくれたのだ」と、将来子や孫に感謝されるだろうと思う。当時、あの渦中にいた自分がそう思っているのだから。

ちなみに、「原発がなければ珠洲の未来はない」などと、いうスローガンが推進派によって声高に叫ばれていたが、原発のない現在どうなっているか。人口は相変わらず減少しつつあり、市町村統廃合も進んだ。しかし自然は残ったおかげで、石川県北部の能登地方一帯は、今年になって先進国としては初めて「世界農業遺産」に認定された。里山里海、生物多様性をベースにした独自の農業文化を存続させている点が評価されたのだという。

確かに人口も少なくなりつつある。しかし虫が増えた。さらにそれを食べる蛙が増え、蛙を食べにコウノトリがやってくるようになった。将来は、日本では絶滅したトキも飛来するようになるそうだ。なかなか悪くない。



能登のシンボルとしても有名な見附島、別名「軍艦島」とも呼ばれる高さ 28 m の奇岩（珠州市ホームページより）

## 辛抱強く想いやりのある東北の人々

### 放射能汚染に対してもっと怒りを！

廣浦 学（JCF理事）

8月29日、東北新幹線で福島駅へと向かう車窓から見た風景には、ところどころ民家の屋根瓦にグリーンシート

が敷かれ、まだ補修できていない屋根瓦が多い事に気づいたが、既に半年近く経っているので震災の傷跡をそのとき感じることなく福島駅に着いた。

福島市に実家のあるボランティアの谷田部裕子さんの案内で、事務局の宮ノ尾さんと一緒に南相馬へ向かう。

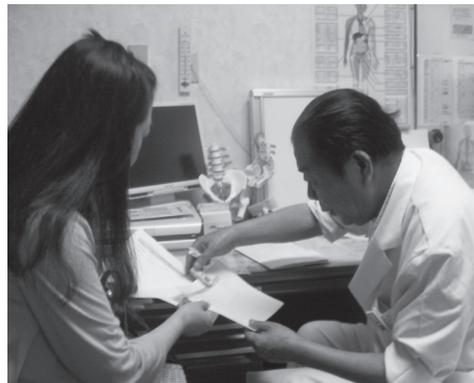
途中、高濃度放射線量汚染地域といわれる飯館村地域を通るが、車内での線量測定でも高濃度（6マイクロシーベルト）を示していた。既に避難されているのか空き家が目立ち、各小学校や幼稚園などにも人影はない。幹線道路を行き交う自動車には何故か県外ナン

バーの県警や自治体が多く、自衛隊ナンバー（見れば分かる装備）も多く往來している。

南相馬市の原町地区中央産婦人科医院（高橋亨平院長）にお邪魔して、加藤丈典さんと合流。加藤さんはガラスバッジ（積算線量計）の支援担当で、その地域の妊婦さんの放射能汚染との関わりをサポートしている。彼も疲れからか、目に悲壮感が漂う。

特に妊婦さんや子どもたちへの影響を考えると、他の地域への避難を含め行政側の対応が気掛かりである。まだこの時点では放射能汚染に対する認識が、私自身も甘かった。

その後、東北電力原町火力発電所付近を海岸沿いに移動し、被災地の現状



妊婦さんにガラスバッジの説明をする高橋亨平院長

を目の当たりにした。地震による影響や津波の傷跡など、自然災害の大きさに驚くばかりだ。特に大津波の影響で陸地奥深くに打ち上げられた船舶には、報道で見る被災地と現実に見る風景に大きな違いを感じた。建造物の跡形も無い平地を見て、すさまじい自然の破壊力の前には人間は為す術がなく無力感さえ抱く。更には原発事故によ

る放射能汚染の付けは、すべて地元住民の皆さんに押し掛かり、市町村、県や国など行政の対応の後手を痛感する。復興を急ぐような姿勢を感じられず、日本の緊急事態への備えの無さを実感する。

南相馬市内の様子は平静を装っている。家屋の倒壊も少なく（耐震性がよかったのだろうか？）、見た目には市内は平穏な感じである。海岸沿いとは全く様子が違う気がした。

汚染規模も地域性があるようだ。海岸沿いの放射能レベルは低く、正常値に近い。しかし山間部（吹き溜まり）では高濃度を示す。また、道の側溝も高い。風の流れに左右するのか、民家でも表側と裏手側で汚染濃度が異なることがある。山林に囲まれた地形では相当量の放射能が存在し、目に見えない恐怖を感じる程であった。

住民の方々は冷静でもの静か、震災の影響を感じさせないくらい屈託なく

お話しできるのだが、実際の胸のうち  
は果たしてどうだったのだろうか？

たぶん本音は“あきらめ”や“期待  
しない”という半ばやるせ無さのよう  
な脱力感を抱いているのではないだろ  
うか。それに怒りや不満をぶちまける  
パワーすら消失するくらい疲弊、虚脱  
しておられるのだろう。これは住民の  
すべての方ではなく、ほんの一部分か  
もしれないが。

ホント！一瞬で時計が止まったと  
いう表現が正しいのかもしれない。大  
袈裟に言うど敗戦直後の希望を失った  
兵隊さんのような印象……（私も経験  
は無いがテレビ等で観た当時の映像か  
ら）を連想する。

このような大災害を経験した方々  
が、凛々しく、秩序を保った生活をさ  
れていることに、日本人の律儀さと忍  
耐強さを感じる。まさに尊敬に値する。

もつと、怒りに満ちて、行政側への  
不満を表明しても誰も文句は言いませ

んよ！ と言いたい。

そもそも原発が安全だなんて、そんな神話を作り出した東電・保安院、行政側の嘘で固めた物語や無責任体制と他人事のような対応にもつと怒っている。団結して、一揆でもデモでも……。

今の日本政府には、被災された住民の方々からの怒りや不満に対して、それを止める資格など無い。虚しい想いと憤りを抱え、帰っていくところがある自分には後味の悪い訪問であった。



2010年94次訪問団 ベト力病院での廣浦理事

## 南相馬訪問

横山 豊子（JCF 監事）

午後4時ころ、南相馬市の中心部、原町地区にある原町中央産婦人科医院に到着。高橋亨平院長にお目にかかった。

6月28日。南相馬市へ

長野佐久平駅でJCF事務局長・神谷さん、加藤さんと、ボランティアの太田さん運転の車で震災・放射能被曝という2重の災害に見舞われた福島県南相馬市へ向かう。車は群馬、栃木と2県を通り、福島県へと入った。白河から東北東へと徐々に向きをかえ、二本松から東北自動車道を下りてさらに走り続け、出発からおよそ3時間たったかと思うころ、単調に流れていく風景画の標識に「一時停止」の標識が。ぼうっとなりかけていた頭が急がしく回ります。30キロ圏から外れているというのに、事故直後から、原釜の北西に位置する飯館村へと高濃度の放射能が流れたことが判

明、屋内退避指示から、計画的避難区域指定と変更され、人口60000人の村は無人と化していった。車の中の神谷さんの話では「いま、1000人くらいは帰村しているそうです」とのことだが、村を通過する10分ほどの間、人の姿はみられなかった。開いている店もなく、わずかに郵便局と信金の明かりが下ろしたブラインドの隙間から漏れていた。いつもなら田んぼには緑の稲がうねり、長い時間をかけて自給的農業を推し進し、畜産の飯館と評価を高めた牛たちやゆつたりと草を食む丘陵が広がる。飯館村は、静まりかえつていく。異様な静寂の中を言葉もなく通り抜け、南相馬市へと入る。

地震発生後の12日〜14日、福島第一原発1号機、3号機が水素爆発を起こし、市の大半が原発から30キロ圏に位置する南相馬市は自主避難区域となり、15日からバスによる避難が始まった。「わずか二日の間にスーパー、店舗、ガソリンスタンド、銀行……ありとあらゆる生活の全てがなくなり、ゴーストタウンと化してしまった」という。産婦人科のある市内5カ所の医療機関も医師他全職員が避難させられ、高橋院長も猪苗代の知人宅へいったんは避難したが、人の生命を問わず医師として自分の選択はこれであったのだろうか、と悩んだ末、二日後、原町へ戻り、妊婦さんや患者さんたち、また切羽詰って頼ってくる人々のために、診療を再開した。

しかし、震災前市内5カ所の病院で1200床あったベッドも10床に制限され、風評被害などで薬剤他の医療物資がまったく届かなくなるなど、いのちをあずかる医療が崩壊寸前に。しかし県も動かず、メディアを通じて訴えるなど、考えうる限りの手を尽くし、ようやく道が開かれるようになった。ただ、6月末時点でも分娩できる医療機関は、高橋院長の所を除いて、全く再開していない。震災・原発事故前は月に百例あった出産は事故後、3カ月が過ぎても南相馬市全体で月に1例まで減ってしまったそうだ。再開しても病院そのものが成り立たないのだというお話に声を失ってしまう。高橋院長は6月24日付けの「南相馬市への緊急医療病床使用改善声明」で、「国民不在のこのばかばかしい国の行政……狂っている」と憤りとともに書き表明している。

病院を辞し、夜8時、被災された方たちの避難所に充てられた市内の小学校体育館へ。震災後、JCFがすぐに支援に立ち寄ったところでもある。その後、少しずつ建設された仮設住宅に入ったり、遠方の親戚・知人を頼って出て行った人たちも少なくないが、今も80人ほどの人たちが避難所暮らしを続けていた。入り口を入るとすぐに、壁のいたるところに掛けられている全国から届いた励ましの寄せ書きや横断幕などが目に入る。大きな薄型テレビが据え付けられ、扇風機が数カ所で回り、洗濯や風呂など最低限の生活機能は確保されているようだが、広いフロアを段ボールで囲っただけのプライベートスペースは着替えも丸見えた。誰にも気兼ねせずに眠りたい……といったささやかな望みが一日も早く満たされることを願わずにはいられない。ここに立ち寄ったもう一つの目的

は、ガラスバッジ（積算線量計）の交換。ここでいっしょに医療活動をした地元の病院の看護師さん3人が、行動記録をつけながら2週間身に付けてくたさっていたものを、計測のため取り替えさせてもらう。明日は、南相馬市、飯館村、伊達市のホットスポットの放射線測定を行う予定だ。

6月29日

9時に原町中央産婦人科医院へ。病院の待合室には毎日の放射線量が掲示されている。本日は病院内が毎時0.11マイクロシーベルト（ $\mu\text{Sv}$ ）。屋外で0.86 $\mu\text{Sv}$ 。

撮影隊がJCFの行く先々に同行した。1991年から、世界最悪の事故を起こしたチェルノブイリ原発の風下に位置し、事故直後、偏西風によって大量の放射能が森や大地に降り注いだ隣国ベラルーシで医療支援を続けてき

たJCFは、はからずも自分たちが暮らす足元を突然襲った原発事故と、まき散らされた大量の放射能の脅威に立ち向かわなくてはならなくなった。

JCFの事務局は長野県松本市。福島県との間に300キロほどの距離があるが、チエルノブイリよりは遙かに近い。スタツフも理事もそれぞれにたくさんの知り合いや身内もいる。が、そうしたことよりも、物言わぬ生き物たちも含め、数百年にわたる子々孫々のいのちの連鎖に深刻な影響を及ぼす放射能。その制御もかなわぬ原発に頼らない産業と暮らしをと声をあげてきたJCFだからこそ、これまでの支援活動のなから学び取ったことを、チエルノブイリと福島を濃密に結んで、54基も原発をかかえる不安に押しつぶされそうになりながらもこの小さな列島でともに生きる道を開くために差しだしたいと動き出した。そうした行動の一端をカメラは追いかける。

午前中は今日の行動予定の確認をしたあと、ホットスポットから逃れ、低線量地区の公民館に避難した保育園を訪ねて移動。南側よりいくらか汚染度は低いとはいえ、園児たちの朝の散歩はマスクをし、わずか30分ほど公民館の周囲を歩くだけ。建物に入るときにはひとりひとりブラシではらつてもらっていた。公民館と道を隔てた林脇の側溝を線量計で測ると、落ち葉が積もった場所と何もないところでは、数値が倍くらい違っているのに驚く。保育園でも園児たちを雑木林には入らせないようにしているという。保母さんたちにもガラスバッジを交換してもらおう。

午後は、地元で出産し、生後1カ月の赤ちゃんをかかえるお母さんの協力で、ご自宅を訪ねる。ガラスバッジを50人の妊婦、赤ちゃん、子どもたちに付けてもらっているが、そ

のお一人だ。ちようど洗濯をしているところで、洗濯物はぜんぶ家の中で干しているとのこと。家の中の数値自体は当然屋外より低いですが、赤ちゃんと一緒に寝ている採光のいい窓際に据え付けたベッドやその周りと部屋の入りに口では倍近く違っていることがわかり、ベッドの位置をずらすだけでもいいのではとアドバイス。

屋外は前庭が地面から1mの位置で1.2 $\mu$ Sv。家の敷地に入る道路際で1.15 $\mu$ Sv。雨樋の水の出口、車庫の波板トタン真下といった、雨水の落ちるところではさらに高い数値に。雨水がたまることで凝縮され高線量になるというが、爆発後空中に拡散し、格納容器を突き抜け下へ流れ出た放射能は今も出続けているのではないか、という不安も拭えない。そこからさらに2カ所、高濃度汚染地区になつていて無人に近い場所で測定。いずれも高い数値。閉鎖された公

民館の前の下水の入り口では4.5〜6.5μSvともっとも高い数値。水道の蛇口ちかくも2.4μSv。松の木の下で2.3μSv。道路際2.8μSv……。このまま住み続け、毎日、空気を吸い、水や食べ物を取取していたらどれだけの放射能が体内に蓄積するのだろうか。

夕方には病院に戻り、高橋院長のお話を伺う。

震災・津波に襲われた翌未明の福島第1原発爆発事故のあと、14日には緊急避難勧告が出され、街はあつという間にゴーストタウンと化したこと。避難民を乗せたバスが延々と連なり、いのちを預かる病院も医師、職員が次々と避難、医薬品も食料もガソリンも生活物資も、一切入らなくなった。自分も断腸の思いで猪苗代へ脱出したが、残された患者さんのことが頭を離れず、医薬品調達に全力をあげ、翌々日には病院へ戻り、診療を再開。産婦人科だけで

なく来る患者さんたちを診ながら開業を続けた。これまで、月に百件の出産を扱っていたが、6月末までに相馬市全体で2例しかないとのこと。

また、放射能による内部被曝に怯える住民のために、全国に108台、県にも1台あるホールボディカウンターを使わせてほしいと要請しても、県はのらりくらりと返事を延ばし続け、遠く千葉県にある「放射医研」（放射性医学研究所）まで運んだ人の測定値も公表しないなど、この国には本気で国民の健康を守るための対策は存在しなかった。いくら交渉しても陰の圧力が必ずかかっていたとしか思えない、と語っておられた。「いまずぐに危険という数値ではない」と言いながら、いつぼうで「屋内退避」から「緊急避難勧告」と、なにひとつ経済的・精神的支援もないまま着の身着のままの住民を追い散らした国と県の連携にはどのような意図があ

ったのだろうか。まさか放射能汚染がデータ化されることを恐れた……、とまでは思いたくないが。

8月29日  
料理研究家、タカコ・ナカムラさんと南相馬市へ

2カ月後、再び南相馬を訪れる機会を得た。6月の訪問時、初めてお会いし、夕食を一緒に食べた。「花と希望を育てる会」の高村美春さんから、後日メールをいただいたことからだった。

前回の訪問の夕食の折、今朝、ガラスパッジ交換に伺った幼稚園に通っているという男のお子さんが、テーブルとフロアーの間を全力疾走するように幾度も行ったり来たりしている様子を「うわあ、元気な子だ!」と感心していたら、高村さんのお話は思いがけないものだった。

「できるだけ外に出さないようにして

いるので、こうして外に出る機会がある  
と、もう夢中であんなふうには走り回  
って。ひとしきりやると落着くんです。  
5月の連休に、友人たちと子連れで県  
境まで息抜きにドライブしたときも、  
車から降りるやいなや、子どもたちが  
みんな、ダーツと走り出して」

空中に放たれた放射能のせいで幼い  
者たちのエネルギーがこんなにも抑え  
られているのだと、さり気なく語られ  
る高村さんの胸の奥に激むものと思っ  
てやりきれなかつた。

そんなことを思い出しながら開いた  
メールに、こんなことが書かれていた。  
「放射能による内部被ばく。取り入れ  
たくない放射能物質ですが、それは悲  
しくも無理な話かもしれません。が、  
食の安全とデトックス（体内から毒素  
や老廃物を取り除くこと）、免疫力のア  
ップ等、手を打つことは少なくないか  
もしれないから」と、〈免疫力を高める〉  
ことにつながる食材の選び方や、調理

方法を勉強したいというものだった。

「すでに市場では『放射能の毒出し』  
『放射能から命を守る食事法』といっ  
た本も多数出ている。けれども、福島  
原発から放出された放射能が食べもの  
や水や空気から周辺に住む人たちの体  
内にどれだけ取り込まれているか、ま  
たその数値、将来の影響などについて  
確かな情報がほとんど提供されていな  
い。その上、専門家といわれる科学者  
たちの発言がさらなる混乱を引き起こ  
しているなかであって、今日、今、子  
どもに何を食べさせたらいいのか。妊  
娠中、野菜や魚や肉をどのように調理  
したらいいのか。情報は錯綜し時間ば  
かりが容赦なく過ぎていく……。指針  
がほしい、手がかりはどこに、と自分  
たちでも声をかけあって学習会を開い  
たが心もとない」と、と相談してこれ  
ただ。

私のところで『WholeFoodでいこ  
う』他の著書を出し、『WholeFood』

丸ごとの食べもの。健康なからだと暮  
らしを実現するには自分を取り巻く  
丸ごとの環境のなかで」と、自身の  
Whole Food スクールで講座を開いて  
きた料理研究家のタカコ・ナカムラさ  
んを紹介した。タカコさんのほうも、  
「この数カ月、講師の天笠啓祐さんに  
も講座で話していた。だいた、義捐金  
を送ったりしてきたものの、自分の無  
力を痛感していたので、少しでもお役  
にたてるなら」と、多忙なスケジュー  
ルを縫っての出張「特別講座」に出か  
けてくださった。

タカコ・ナカムラさんは、

「からだに負担になるようなものが  
入ってきたら、代謝というメカニズム  
を通して解毒して外に排出するといっ  
た、自然治癒力が体には具わっている  
ものの、放射性物質に関してはデー  
タが少なすぎる。だから、素材を50℃  
くらいのお湯で洗って酸化物質を落とす  
たり、調理も、急激に酸化を促進する

ので煙が出るほどの強火で炒めないように、油も酸化しにくい良質な油を少量使いたい」

と、自然治癒力を高める工夫について触れながら、塩麴を使う調理法、100℃ではなく90℃以下の低温での蒸し料理などのレシピを実践講義。そして「いちばん大切なのはおいしく食べる」と結ばれ、2時間の予定が1時間近くも延長、和やかで笑顔があふれるひと時となった。

2世代、3世代がいつしよに住む家庭もたくさんあり、家の中でも「放射能」とひとこと言っても家族に拒否反応を示されたり、「食べものの放射能」への不安さえ口にできなかつたりと、ストレスがたまることも多いので、楽しく料理しながら、日々の食事で気をつけられることなどについて話し合えるこうした機会をもてて本当によかったと、言ってくださった高村さん。ご自身も被災者でありながら、子育ての

かたわら、同じ被災者、特に独り暮らしのお年寄りや体のご不自由な方たちを訪ね、花をいつしよに育てたり、原発まで20キロの道を仲間の方たちとヒマワリの種を蒔き花を咲かせる活動を続けておられる。そんな多忙な日々の中、この日の特別講座を開催してくださったのだ。

私もほんの少しだけお役に立ててうれしかった。

これからも、ささやかではあるけれど、持続して南相馬や原発現地の人たちとつながっていききたいと思う。



JCF 理事会で横山監事（中央）

## 子どもを守るために

高村美春（南相馬在住）

3月11日。

私たちは「明日」というものが当たり前に来るものと思っていました。

あの日から当たり前の日常が目の前から消えてなくなりました。

地震、津波、そして原発問題、自然の力ではなく同胞と呼ぶ人間の手により私たちの未来も故郷も奪われたのです。

津波により肉親を亡くし、思い出の品々は消えてなくなり、その地の絆まで失くした人たちに原発はさらに追い打ちをかけました。

見えない「放射能」は身体に危険なだけではありません。コミュニケーションさえも壊し、日々の生活や将来への不安をかき立て、生きがいを奪い、子どもたちの心まで傷つけました。

そして、家庭の中でも放射能の危険性についての認識の温度差で、人は傷

つけあい、泣くことも笑うことも心の自由にさえも失い、「鈍感」にならないと生きていけないのです。

私たちは今、何に試されて生きていくのでしょうか。

現在、私は南相馬市原町区にてJCFのお手伝いとして活動させていただいております。ガラスバッジ（積算線量計）の回収、鎌田理事長のアテンド、また除染に関する情報の収集、モニタリングマッピングなど仕事は様々です。

そして私自身も4歳の息子もガラスバッジをつけさせてもらっており、5月からの積算を計算すると息子は1ミリシーベルトを超えています。

文科省は「暫定の20ミリシーベルト」を撤回し、「1ミリシーベルトに下げよう努力する」と、やっとまともなことを言い出しました。では、もう1ミリシーベルトを超えた子どもたちはどうすればよいのでしょうか？

放射能は「足し算」です。外部被曝

はもちろん、食物による内部被曝などを足さねばならないのです。

しかし「危険」という意見や「安全」という意見に翻弄され、何が事実かも知らされず、国や行政に惑わされています。活動を通じていろいろな情報を頂きますが、当方すら「鈍感」になりつつあります。そうでないと心の平穩を保てないからです。

ですが「数字」は、確実に事実を見せつけてくれます。その日のモニタリングマッピングの数字は、発表でわかります。

では自分が受けた放射能の量は、誰が計算するのでしょうか？

その日出掛けた場所の放射能をガイガーカウンターでチェックしていると、罵倒され「自己満足で測るな！」「不安をあおるな」と罵声を浴びたこともあります。

我が子を守るのには親の務めです。無理解なのでしょうか。いいえ、理解を

しようとしなない「無関心」なのです。自身が「緊急時避難準備区域」にいるも他人事なのです。

放射能に匂いがあり、色があり、手にとるように危険とわかれば関心をもつてくれるかもしれません。それならばJCFの活動で積算線量を知り、「放射能」から一人でも多く逃げる事ができるのでは、あるいは関心を持つてくれるのではないかと思うのです。

震災の二日後、息子だけを父親のいる埼玉へ脱出させました。私は仕事があり残ろうと決めたからです。しかし、仕事はなくなり、避難を余議なくされました。私はしばらくしてボランティアをするために、南相馬に戻ってきました。2カ月経った頃、精神が不安定になり「笑わない子ども」になった我が子を、危険とわかっていても南相馬に帰すしかなかったのです。

親の仕事のために子どもを危険な場所に置くことを毎日悩んでおりました

が、「事実」を証明するガラスバッジが背中を押してくれました。悩んで苦しんで、そして子どもを再び避難させようとした。故郷を去る罪悪感、これからの未来への不安、仕事や金銭的なこと、知らぬ人ばかりの土地への不安。ですが、5年後10年後、後悔しないためには、やはり動かなければいけないのだとガラスバッジが教えてくれました。

日本の英知が結集して除染に取り組んでいてくれます。結果も出てきていますが、放射能は足し算なのです。今こうしていても、子どもは有害なものを浴びているのです。

元の美しい、何もなければただ自然の豊かなふるさとを取り戻したい、そして子どもをそこへ帰りたいのです。健康な体で帰りたいのです。土に触れられず、線量の低いアスファルトの上だけでしか走り回れない、線量の高い外で遊ぶなどもつてのほかで、歩

く場所も決められ自由に出て歩くこともままならない「今日」を、自然に線量など気にしないで遊べる「明日」にして、子どもに与えたいのです。

留まるも自由、出るも自由、戻るも自由だと思います。しかしその為には「事実」が必要です。そして「無関心」ではいてほしくないのです!!

原子力というものが限り、誰にでも起こりうる「現実」なのです。

ご縁を頂戴し、その「事実」をもたせさせてくれたJCFに、感謝とお礼を申し上げたいと思います。



寺内公民館の石段の上から降りないで遊ぶなかよし保育園の園児

# 絆

## 遠藤 清次



避難所で診察する遠藤医師

### 山家先生のこと

私が、内科の山家誠先生とともに小高町立病院（後の南相馬市立小高病院）に赴任したのは、平成15年4月であった。山家先生は、私より一回り（12歳）若く、体格は二回りも大きい。短髪で、

大きな目は眼光鋭く、その風貌から受ける第一印象は「こわい人」であったが、すぐに、優しい人であることが分かった。豪快な言動と繊細な心遣いを合わせ持った人でもある。

消化器内科を専門とする山家先生が診断し、外科の私が手術を担当するということの積み重ねによって、患者さんからの信頼とともに、私と山家先生との信頼関係が深まっていった。その後、幾多の困難な状況に出会ったが、山家先生がいたからこそ乗り越えられたと思っている。

平成23年3月11日、大地震、大津波が発生した後、病院では私と山家先生

の指揮の下、外来では津波に流され命からがら病院までたどり着いた人々の対応、病棟では余震のたびに入院患者さんの安全確認、さらに津波の到達に備え2階病棟の患者さんを3階病棟に移動させる作業に職員が一人となって当たっていた。

3月12日、福島第一原発1号機の爆発事故によって、当院にも20キロ圏外への避難指示が出されたが、寝たきりの患者さんが多く、私たちの力だけでは身動きが取れずにいた。3月13日、福島第一原発から23キロの地点にある南相馬市立総合病院に小高病院の全患者さん、全職員の避難を受け入れてもらった。

総合病院の事務方から、「小高病院から何人の患者さんを避難させましょうか」というような内容の電話を山家先生が受けて、即座に「全員だ」と大声で答えるのを聞いて、その迫力に圧倒された。私にその対応ができたであ

ろうか。

総合病院に避難した後も、さらに困難な状況は続いた。3月14日、15日の福島第一原発の爆発事故により、20〜30キロ圏内に屋内退避指示が出され、入院患者さんを30キロ圏外の安全な所に避難させなければならなくなった。

特に困難を極めたのは、人工呼吸器を装着された患者さんが3人いて、約百キロ離れた病院まで救急車に人工呼吸器ごと患者さんに乗せ、医師一人が同乗して移送したことである。山家先生が2往復、私が1往復した。山家先生がいなければ実行できなかった。3月20日までに総合病院、小高病院ともに全入院患者さんの避難を完了した。その後、総合病院の方針で、病院に残る職員の数を極端に減らしたため、小高病院の職員が総合病院に残ることはできなくなった。

山家先生は小学生の子どもがいたため、奥様の実家がある東京に避難した。

山家先生の提案で、小高病院職員の解散会を南相馬市にある山家先生の実家でを行い、40人位が集まった。誰もが言えないような悲しさ、悔しさの中にあつて、度重なる苦境をとともに乗り越えてきたという達成感、満足感もあり、涙と笑いが入り混じった、忘れられない解散会になった。山家先生に心から感謝している。また、一緒に仕事ができたらいいと思つている。

### 鶴島さんと栄養サポートチーム

管理栄養士の鶴島さんが小高病院にやつて来たのは、平成17年4月である。宝塚歌劇団の男役のような容姿から、取っ付き難い人かと思つたら、気さくで快活、情に厚く涙もろい、浪花節が似合う人だった。歓迎会で私が「小高病院に鶴島ありと言われるようになってください」と言つたのだと、後で彼女から聞かされたが、私はよく覚えて

いない。

私は以前から関心があつた栄養サポートチーム（NST）について、鶴島さんに話してみた。私はNSTに、病院全体を良くする可能性を感じていた。栄養はすべての医療の基本であり、それを多職種がチームとして支援するのがNSTである。鶴島さんは「小高病院でも是非NSTをやりたい」と力強く私の背中を押してくれた。

それから、約1年間、院内勉強会を重ねながら準備を進め、平成18年4月から小高病院NSTが稼働した。その後も、週1回のNST回診・ミーティング、月1回の勉強会を1度たりとも欠かすことなく、こつこつと続け、平成19年4月にNST稼働施設認定を受け、平成22年4月にNST稼働施設認定更新を受けることができた。これは、ひとえに、鶴島さんが私の背中を押し続け、やる気にさせてくれたことと、彼女が総看護師長や病棟看護師長、葉

局長、検査技師長と密に連絡を取り、チームをまとめるマネージメント能力に長けていたからである。私が鶴島さんを「参謀」と呼ぶ所以である。

平成23年3月14日、福島第1原発3号機の爆発が起り、南相馬市立総合病院の院長が全職員に「避難するのでも病院に残るのも随意である」と言ったことで、総合病院の職員は若い人が多かったこともあり、残った人は3分の1位に減ってしまった。

一方、小高病院は、3分の2位の職員が残った。総合病院の給食室では、昼食の準備途中で誰もいなくなつた。総合病院と小高病院の全体ミーティングで、管理栄養士として唯一人残つた鶴島さんが紹介され、彼女の指揮の下、看護師たちが協力して患者さん、職員の食事を確保していくことが決められた。これぞ、「小高病院に鶴島あり」である。宝塚歌劇団の男役トップスターのように輝いた瞬間である。小高病

院の看護師たちも、総看護師長の指揮の下、入院患者さんの命を守るため、身体的・精神的負担の限界まで頑張ってくれた。NSTの活動を通して培われたチーム医療の意識・実践が生かされた結果だと誇りに思う。

### 横山さん夫妻と小高病院を守る会

横山さん夫妻との出会いは、旦那さんが首の傷で小高病院の外科にかかり、私が治療を担当したことだった。その後、ご夫妻には小高病院の中庭に季節の花々を飾っていただいた。中でも、九輪草は春の中庭にひとときわ彩を添えてくれた。

平成20年10月、小高病院の常勤医が3人にまで減つて病院の存続が危ぶまれた時、私は病院長として、機会を見つけては地域の人々に病院の状況を説明した。そうした中で、横山さんたちの活動を紹介したところ、小高病院の

ために何かできることはないだろうかという人々が集まつて「小高病院を守る会」が結成された。その後、「守る会」は小高病院の存続を求める署名集め、地域医療を守ることをテーマとしたフォーラムの開催、小高病院の敷地内清掃など、いろいろな方法で小高病院を支援してくれた。そのお陰で何とか小高病院を続けて来ることができたと思っている。

3月11日の大地震、大津波で横山さんたちが住む地区は一瞬にしてすべてがなくなつてしまった。横山さん夫妻が高台の避難所にようやくたどり着いて数分後のことだったそうだ。津波にのみ込まれた人々を目撃したという。心に受けた傷は想像を絶するものだろう。

横山さん夫妻や仲間の人たちは、着の身着のまま、新潟県の三条市に避難した。後に私が三条市の避難所を訪れた時、皆が集まり、「よく来てくれた」と言つてとても喜んでくれた。「三条

市の人々には、本当によくしてもらっている、感謝の気持ちで一杯だとも話された。横山さんたちは、今、南相馬市の仮設住宅や借り上げ住宅に戻ってきた。小高病院を引き継ぐような医療施設を仮設住宅の近くに造ってもらえないかと、いろいろな方面に働きかけているという。

## 鎌田實先生との出会い

私が初めて鎌田實先生に会ったのは、平成19年4月、宮城県角田市にある「虹の園」という障害者支援施設で鎌田先生のミニ講演会が開催された時であった。私、鶴島さん、事務長補佐の鈴木さんの3人で出かけて行って、講演を聞かせていただき、鎌田先生と一緒に写真に納まり、鎌田先生の本にサインをいただいて、大感激、大興奮で帰って来たのを覚えている。

次にお会いしたのは、平成22年7月

22日、南相馬市で鎌田先生の講演会が開催された時である。主催者が小高病院の高橋事務長と親友であったことと、「守る会」の小林さんが主催者に頼んでくれたお陰で、幸運にも講演後の会食に同席させていただいた。3年前に「虹の園」でお会いしたことを話したら、鎌田先生は覚えていらっしやったので、私は驚いてしまった。鎌田先生は翌日から始まる相馬野馬追を見学されること、初めて食べたホッキゴ飯がとても美味しいとおっしゃったことなどを覚えているが、私は終始、緊張していた。

そして、今回の大震災後、平成23年3月16日のことだったと思うが、それまで全くつながらなかつた私の携帯電話が鳴り、「遠藤先生、生きてるかい、鎌田でーす」と大きな声が聞こえた。私は、何が起こっているか考えられず、少し間を置いて、「鎌田先生ですか、ありがとうございます、私は元気です」

と答え、福島第一原発事故後、20〜30キロ圏内に出された屋内退避指示のため、人と物の支援が受けられない窮状を訴えた。鎌田先生には「できる限りの支援をする」と約束していた。出口の見えない暗闇でもがき苦しんでいるところに、希望の光が差し込んだように、大いに勇気づけられた。有難いことだと思った。

鎌田先生は、3月25日に南相馬市に來られた。3月21日から支援に入っていた諏訪中央病院の医療チーム、JCFの神谷さんたち、神宮寺の高橋さんたちと合流し、市内2カ所の避難所で、「おでんパーティー」を開催していた。避難所では、屋内退避のため屋外での炊き出しがでぎずにいた。レトルト食品のおでんと、医者からもらう薬より効くと評価が高かつた液体の薬（ビール、焼酎）が、ふるまわれた。「初めて、温かいものが食べられた」「液体の薬が一番効く」と、避難所はまる

でお祭りのようであった。皆が笑顔になり、身体と心が芯から温まったひと時であった。

私が感じたのは、鎌田先生の感性の鋭さである。とことん現場に足を運び、人の心、空気、風景などを自身の五感を目いっぱい働かせて感じ取ろうとされているように思う。もしかしたら、長く、患者さんに寄り添う医療をされてきた鎌田先生には、すべてが自然にできてしまうことなのかもしれない。

### ＪＣＦと諏訪中央病院医療チーム

ＪＣＦは、3月21日支援に入つて来られた。孤立無援のこの時期に支援に入つて来てくれた最初の医療チームであった。本当に有難かった。私たちは疲れ果てていたが、勇気と希望をいただいたと思つている。ＪＣＦの神谷さんと加藤さんは、市内の避難所を回り、特に、小さな子どもがいる親御さんた

ちと面談し、放射線の心配のない長野県への移住を勧めた。神谷さんは、静かに、ゆつくりと、丁寧な話し方をされる。時には、「あなたは医療関係者でもないのに、どんな資格があることもあった。しかし、神谷さんは信念の人だ。言動は一貫している。チエルノブイリ原発事故後の支援を20年も続けてきて、日本ではそのような事故を決して起こしてはいけないと思つてきたのに、福島原発事故が起こつてしまい、悔しくてたまらないという気持ちも被害を受ける子どもたちを何として守りたいのである。神谷さんたちは、これからまずつと、子どもたちを放射線から守るため尽力されると思う。

### これから私にできること

5月から福島県の猪苗代町立病院に勤めていた。一時は猪苗代町内の避難所に3千人を超す人々が避難されていた。猪苗代町立病院でも、被災された人々の心に寄り添うように診療しようと心掛けてきた。震災から6カ月が経った今、避難所にはほとんど人がいなくなった。小高の人々も南相馬市の仮設住宅に戻っているという。

小高病院は今年度限りで閉院になるようである。私は、小高病院が果たしてきた役割、心を引き継ぐ医療機関を、かつて小高に住み、小高病院を守ろうとしてきた人々のためにも、是非とも再興しなければならぬと考えている。今回の大地震、大津波、福島第一原発事故によつても断たれることになかった絆、そして、新たにできた絆を大切にして、目標に向かって進んでいきたいと思う。

私は、4月末に小高病院を退職し、

### 第3回イラク医師招聘研修

## 信大の協力で充実の研修



信大でのフローサイトメトリーの研修 左からナシール医師、サルマ医師、伊東検査技師、リカ医師

イラクから、小児がんと白血病治療のリーダー的存在であるお二人の医師を松本に招聘した。それぞれに明確な目的があり、信州大学で研修されたことが、イラクで活かされていくことを願っている。

### 第3回イラク医師招聘研修

## イラク小児白血病治療の

## リーダー来日



ナシール医師（左端）サルマ医師（右端）

9月16日イラクから、はるばる24時間かけて2名の医師が来日した。

バグダードの小児福祉教育病院から、サルマ・アルハッダード医師、クルド自治区ドホーク教育病院からナシール・アルアッラーウィ医師

お二人は、イラクにおける小児白血病・小児がん治療のリーダー的存在である。

9月20日の記者会見では、2年半前に来日し、イラクの白血病の子どもの遺伝子研究をしているリカ先生の途中経過についても報告を聞いた。

リカ先生の遺伝子解析によって、予後のいい38%の子ども達に、助かるんだという希望を持ってもらえる。現地医者達も助けられるという自信を持って治療に当る。そこに具体的な薬品の支援をしていく可能性を探りたい。

イラク・バグダードでは、80年代の戦争と、イラク戦争後続いたテロに

よって、生活インフラが破壊された。最近になってようやく1日1〜4時間電気が通るようになったそうだ。検査体制の不備、看護師教育、貧しさから子ども達が治療に病院に通えない等、問題は山積している。

お二人の先生は、遺伝子解析の方法について学びたい、医療文献の補充・看護師研修・医師トレーニング・診察や治療についての協力関係を構築したいなど、信州大学医学部での視察の抱負を語られた。

地震・津波からの日本の復興の勢いをインターネットで見たサルマ先生が、日本人のすばらしさを讃えてくださった。外から見た日本も興味深い。数年来、サルマ先生を日本にお呼びしたいと願ってきた。今年、松本に先生方をお迎えできたことを、とてもうれしく思っている。

### 第3回イラク医師招聘研修日程

月日	スケジュール	滞在場所
9月14日(水)	サルマ医師 バグダード→アンマン	アンマン泊
9月15日(木)	ナシール医師 アルビル→アンマン	アンマン泊
9月16日(金)	アンマン→アブダビ→	機中泊
9月17日(土)	成田着	東京
9月18日(日)	東京見学	東京
9月19日(月)	松本着	松本
9月20日(火)	記者会見 信州大学附属病院での歓迎会	松本
9月21日(水)	信大病院研修(中央検査室)	松本
9月22日(木)	信大病院研修(PCR・救急・ケモセラピー)	松本
9月23日(金)	信大病院研修(PCR)	松本
9月24日(土)	オフ	松本
9月25日(日)	オフ	松本
9月26日(月)	信大病院研修(フローサイト・放射線科)	松本
9月27日(火)	信大病院研修(PCR・全身放射線照射治療)	松本
9月28日(水)	信大病院研修	松本
9月29日(木)	成田発	機中泊
9月30日(金)	アブダビ→バグダード	

PCR : DNA のある一部分だけを選択的に増幅させる方法

☆ サルマ医師、ナシール医師への支援医薬品

- ・ 骨髄穿刺針 各1ケース
- ・ ロイナーゼ(抗がん剤) 300本
- ・ G-C-S-F(がんの化学療法時に使用する薬剤) 200本

### 第3回イラク医師招聘研修

## 信大医学部附属病院の協力により 充実した研修が終了

加藤 丈典

◎9月20日

- ・小児科ミーティング 小池医師
- ・教授回診 小池医師
- ・ナースセンター 坂下医師
- ・輸血センター 下平医師
- ・先端細胞研究センター 下平医師

教授回診は想像していたものと異なり、何か和気あいあいとした雰囲気の中で回診でした。

サルマ医師もナシール医師もリラックスした様子でした。

医学部附属病院輸血部・先端細胞治療センターでは、昨年同様に英語の堪能な下平滋隆准教授が、非常に丁寧な解説で案内して下さいました。

研修終了後、サルマ医師、リカ医師のお二人は「百円シヨップ」へ、僕とナシール医師はホテルへ。その後合流しリカ医師も含めて一緒に夕食を頂きました。

サルマ医師は非常にお元気です。夕食もすっかり食べておられました。初日として良いスタートを切れました。

ナシール医師から骨髄穿刺針のサンプルを持って帰りたいとのリクエストがありました。

◎9月21日

- ・外来 坂下医師
- ・小児外来処置室 坂下医師
- ・院内学級
- ・遺伝子解析実験ラボ リカ医師
- ・中央検査室 菅野光俊技師長
- ・遺伝子解析実験ラボ リカ医師

外来の受付と清算のシステムに驚かれ



左から坂下医師、下平医師、リカ医師、サルマ医師、ナシール医師



るのは毎年の恒例のようになりつつあります。また電子カルテシステムも実際に見せていただきました。左の写真でサルマ医師の腕にかざしている機械は血管透過機の新しいもので、非常にはつきりと血管像を浮かび上がらせることができ、血管がなかなか浮き出てこない幼児の腕への注射等

にとても有効だそうです。

院内学級は今日はあまり生徒さんはいなかったのですが、一人だけいた生徒さんはピアノが堪能で、素晴らしい演奏を聞かせていただきました。

また今日から遺伝子解析のプロセスも始まり、PCRマシンにかける前準備を午後から行いました。ナシール医師はイラクでPCRを用いた解析を独自に行うことが当面の最大目標であるので、リカ医師の実験に非常に大きな関心を持たれ、熱心に色々と研究に関する質問などをされてきました。

今日はこの準備のため7時頃まで病院に残っておりました。中央検査室のオートメーション化されたシステムについても例年のごとく、感心されています。またこの責任者の菅野技師には生物検査、細菌検査、遺伝子解析室などすべての部署を案内していただきました。

◎ 9月22日

まず午前中は、PCRによる遺伝子解析実験の続きを行いました。昨日準備したサンプルを今日はPCRで解読。ナシール医師が現在ドホークで行っている実験が正しく行われているかどうか確かめました。ドホークで行ったものと、日本での結果がしっかり照合でき、ナシール医師も喜んでいました。その後はスライドサンプルをギムザ染色にて染色。ギムザ染色については、リカ医師が、ラボ（検査室）がご専門のナシール医師に指導を仰ぐ事になりました。

ナシール医師もかつてはサルマ医師とバグダッドの同じ職場で働く同僚だったこともあり、和気あいあいとお互い教えたり、教えられたりといった感じで今日の実験は進んでいきました。

その後は救急の関口医師の案内で先進救急センターを見学。人工心肺装置な



ERでのサルマ医師（右）

どのER（救急救命室）内施設と救急オペ室を見学。また運ばれてきた重傷患者さんの写真データなども詳細に見せていただきました。

次にICU（集中治療室）を見学、リカ医師の知り合いの女の子のお見舞もしました。

そして恒例のヘリポート見学、AED

（心臓救命装置）のレクチャー。

本日最後は外来化学療法室見学。

重村医師に案内していただきました。

信大の化学療法外来は日本でも有数の素晴らしいということ、リクライニングシートで、テレビや映画を見ながら治療を受けることができるシステムに、皆さん感嘆されていました。

また化学療法の副作用を考慮し、セクターの一角には女性用のウィッグや帽子なども置かれていて、ご自身も抗がん剤治療で同様の経験を持つサルマ医師などは非常に感激していました。

### ◎9月23日

病院は休みですが、12時まで研究室で実験。

その後1時から4時までヤマダ電機で買い物、リカ医師とサルマ医師は9時まで8時間も買い物をしていました。

体調を心配していたサルマ医師も非常にお元気です。

### ◎9月24日・25日

研修はお休みで、「おひさま」人気にわく安曇野を散策しました。

### ◎9月26日

朝から伊東さんによるフロアサイトメトリーのレクチャー。

前回、前々回のレクチャーよりも簡潔になり、実験結果を出すまでにびつたり2時間半程で終了しました。

つきつめればさらに複雑になるフロアサイトメトリーのレクチャーですが、このぐらいで今回はちょうど良かったという印象です。

午後1時からは先日リカ医師が撮影した中心静脈瘤カテーテル導入のビデオ見学。

午後2時からは伊東さんに付き添っていただき、放射線科を見学。3Dモデ



画像診断室

リング処理された、CT画像やMRI画像を見学。

小児急性リンパ性白血病患者さんの画像を基に、アスパラギナーゼ投与による腎肥大などの副作用についての診断など細かく議論していただきました。本日は午後4時前に終了し、ナシール医師もお疲れの様子だったので早くホ

テルに戻りました。

ナシール医師からPCR解析に必要な試薬や消耗品などのリクエストがありました。

◎9月27日

本日は午前中は松田医師とFISH染色による解析過程を、午後は全身放射療法を平林医師と見学いたしました。放射線療法を受けていた男の子は通称MDS（骨髄形成症候群）と呼ばれる骨

髄性の難病だそうです。

男の子のお母さんも治療中心配そうにされていましたが、両ドクターが「私達も応援しています。」と声をかける

◎9月28日

午前中は遺伝子解析の手法をラボの松田さんに非常に丁寧な解説で、手取り足とり教えていただき、一通訳者に過ぎない私も非常に感動いたしました。

その後、小池医師がお別れのために時間を割いてくださり、またお土産もいただきました。

今回の研修は、福島原発被災者支援やチエルノブイリへの訪問団派遣など複数のプロジェクトと同時進行だったにもかかわらずスムーズにできたことは、やはり信大の皆さんの献身的な協力のためだと思います。

◎9月29日

成田から帰路に就く。最終日は「アラブの子供と仲良くする会」の伊藤政子さんや、原さんがお別れに来て下さり、伊藤さんとはかれこれ6時間ほど飽く事なく旧交を温めていらっしやいました。

サルマ医師、ナシール医師から「今回の信大での研修が非常に充実していた」とおっしゃっていただきました。

# 2011年度 JCCF 通常総会



福島支援について話し合う、左から阿木理事、正会員の谷田部さん野口さん

## 2011年度 通常総会

2011年7月16日(土) 17時～19時

(財)総評会館404会議室

正会員総数85名

出席正会員8名・委任状45名

### 審議事項

第1号議案 2010年度活動報告

第2号議案 2010年度決算報告

第3号議案 2011年度活動計画  
会計監査報告

第4号議案 2011年度予算案

### 第1号議案 2010年度活動報告

◆1月に寒天事業がスタートした。

◆3月11日、東日本大地震・津波・福島第一原発事故

◆チエルノブイリ医療協力

◆チエルノブイリ医療協力

①第94次訪問団派遣

ベトカ地区病院に内視鏡をセツトアップした。

ゴメリ州立病院附属産院へ生化学分析器の試薬1年分を供与した。

放射線医学人間環境センターにグラシオン200v(がんの化学療法をサポートする薬剤)を供与した。

②4月、ベトカ地区病院長ジミナ・ナジェージダさんを招聘し、報告会を行なった。

◆イラク白血病支援

①医薬品・医療機器の供与

☆セントラル小児教育病院

セルセパレイター消耗品を供与

ポリミキシン供与

☆小児福祉教育病院

骨髓穿刺針

グラン

アスパラギナーゼ

☆ナナカリー病院

エコー

セルセパレイター消耗品

フローサイトメトリー試薬

## ②医師招聘研修

セントラル小児教育病院・タリーク・シュジャイリー医師、小児福祉教育病院・ハサナイン・ガリー医師

11月25日～12月8日、信州大学附属病院で、イラクでの移植治療を目指して、献血システムから病棟での患者管理まで、見ていただいた。

③リカ医師のイラク白血病患者の遺伝子解析研究に協力した。

## ④第10回J I M—N E T会議参加

### ◆国内広報活動

・広報誌「グランド・ゼロ」季刊発行  
・ベトカ地区病院長ジミナ・ナジェー  
・ジダさんの報告会

・脱原発社会に向けて  
2011年1月15日 「ミツバチの羽音と地球の回転」の上映会

### ◆福島第一原発事故、南相馬支援

・支援品（葉・食料・紙おむつ・トイレ  
ットペーパー・マスク・雨合羽・布団など）  
・南相馬市立総合病院外来と避難所健康診断

## 第2号議案 2010年度決算報告

・3月末に告知した福島支援のための寄付が、短期間だったにもかかわらず多く集まった。

・前年度から継続していたベトカ地区病院への支援は、内視鏡を日本で購入し、輸送、現地に設置することができた。

・スタディツアーがモスクワのテロ事件で中止となった。  
・助成金が見込みより少なかった。  
・海外支援キャンペーンによる寄付が集まらなかった。

## 第3号議案 2011年度活動計画

・福島第一原発事故による放射線被害が深刻になっている。現地の方々に添った防護対策に取り組みながら、社会のあり方やエネルギーについて問い直していく。

### ◆チエルノブイリ医療協力

#### ①第95次訪問団

・ベトカでの母子調査  
・ゴメリ州立病院附属産院と放射線医学人間環境センターへの試薬とグランの供与

### ◆イラク小児白血病・小児がん支援

・今年度は、イラク支援への寄付収入が非常に厳しくなると予想される。医師招聘研修及び白血病発症研究を優先し、継続事業は、予算を獲得しながら進める事とする。

・短・中期計画に基づいて、急性リンパ性白血病の寛解率を上げ、将来的に

イラクで移植治療ができるよう支援する。

① 医療資材・医療機器の供与

☆セントラル小児教育病院

セルセパレイター消耗品

☆小児福祉教育病院

G | C S F

アスパラギナーゼ

② 医師招聘研修（9月14日〜30日）

小児福祉教育病院：サルマ医師

ドホーク教育病院：ナシール医師

③ リカ医師の調査研究に協力

④ J I M | N E T 会議へ参加

◆ 福島第一原発事故支援

未曾有の地震・津波によって、東北地方太平洋沿岸は、大被害を受けた。そして、同時に起こった福島第一原発事故による放射性物質の被害の甚大さは、私達をおびやかし、いま尚、収束のめどが立っていない。

大震災直後、南相馬市に支援に入った

経緯から、南相馬市を中心として、汚染のひどい地域住民と連携して、放射線による健康被害への防護策を考えていく。特に妊婦、乳幼児、成長期の子どもたちへの支援を行なう。

① 緊急支援

・ 支援物資輸送と炊き出し

・ 諏訪中央病院医療チームのコーディネート

・ ネットと医薬品支援

② 放射線による健康被害を軽減する。

・ ガラスバツジ 50 個を妊婦さん・乳幼児・子どもたちに付けてもらい、外部被曝積算量を測定し、生活のアドバイスを行う。

・ ガイガーカウンターを貸与し、福島の方が身近な場所の放射線量を測定し、ホット・スポットを明らかにすることによって、できるだけ被曝を避けるようにする。それらの情報を地域で共有する。

・ 食品汚染を測定する

食品汚染測定器を購入し、測定することによって、食品からの体内被曝を防ぐ。設置場所・測定人材について検討する。

・ 長野県への短期保養

（株）カタログ・ハウスの夏休み保養に協力し、健康診断オプションを J C F が行う。信州大学医学部小児科の協力を得る。

◆ J C F 講座・セミナー

・ イラク医療報告会

・ 脱原発を目指し、現代社会を見直す学習の場として、J C F 主催の講演会もしくは上映会を企画する。

◆ 国内広報活動

・ 広報誌「グラウンド・ゼロ」季刊発行

◆ 募金キャンペーンの継続と収益事業

第 4 号議案 2011 年度予算案

・イラク支援は、医師招聘と白血病発症研究を優先的に実施していく。  
 ・福島原発被害への支援を、寄付を有効に使いながら、進めていく。

起きてはならない原発震災でした。この未曾有の事故に対して、私達JCFは、福島の妊婦さん、赤ちゃん、子ども達を放射線の被害から守るための活動を、できる限りしていこうと思います。トライ＆エラーになるかもしれませんが。しかし、皆さんからのアドバイスや情報をいただきながら、福島の方々とつながっていきます。応援をよろしくお願いいたします。

## 2010 年度収支報告書

(2010.4.1 ~ 2011.3.31)

科目	2010 年度決算額
経常収入の部	
会費収入	1,613,500
寄付収入	37,060,464
助成金収入	2,000,000
C D・寒天事業収入	8,778,941
その他事業収入	256,407
収入の部合計	49,709,312
経常支出の部	
チェルノブイリ支援	10,486,791
イラク支援	16,685,589
福島原発被災者支援	431,190
国内広報活動	1,721,082
C D・寒天事業費	3,444,443
人件費	13,285,458
一般管理費	5,881,779
支出の部合計	51,936,332

## 2011 年度予算

(2011.4.1 ~ 2012.3.31)

科目	2011 年度予算額
経常収入の部	
会費収入	1,600,000
寄付収入	32,000,000
助成金収入	3,000,000
C D・寒天事業費	8,000,000
その他事業収入	210,000
収入の部合計	44,810,000
経常支出の部	
チェルノブイリ支援	1,500,000
イラク支援	3,300,000
福島原発被災者支援	26,000,000
国内広報活動	2,100,000
C D事業費	2,600,000
人件費	14,300,000
一般管理費	6,750,000
支出の部合計	56,550,000

2009 年度繰り越し収支差額	42,433,821
2010 年度繰り越し収支差額	40,206,801



NO.45

おのづから然り

宮尾 彰

職務で市内の子育て支援センターを訪ねた日、ちようど月に一度の「音楽遊び」が行われていました。

ホール中央で、婦人の音楽療法士がキーボードの伴奏に合わせて、足踏みをしながら歌います。やがて、あちこちでぬいぐるみを抱いたり絵本を読んだりしていたお母さんと幼児たちは、大きなひとつの輪になりました。

『大きな栗の木の下で』の行進に始まり『お花が笑った』のパネルシアターで終る一連のプログラムは、居合わせた誰をも疎外することなく、その場にゆつたりとした流れを創り出しているのです。

忘れ難いお話をお聴きしたのは、その後スタッフとお茶をこ一緒した時のことです。

特別支援学校や障害児施設でセッションをする際、軽度のお子さんには各自で好きな楽器を選ばせ、選べない相手には彼女がその子に即した楽器を与えるのだそうです。

特に重症心身障害児と呼ばれ、自力ではほとんど身体を動かすことのできないお子さんのためには、微弱的な動きで音の出るような楽器が配慮されているのです。

自分のパートを自覚して動ける子。傍らの介添えでわずかに身体の一部を動かすだけの子。理解力や能力に違いのある参加者が、全員でひとつの音楽を奏でます。

そんな時、音の流れの中で、重度のお子さんの出す音がまったく無作為かつ唐突に大きく響くことがある、そして実際にその音こそが、演奏全体の「通奏低音」を成しているというのです。

このセツシヨンのように、最も力の弱い存在を真ん中にして成り立っている市民の輪があります。それが、今から八年前に岡山県倉敷市で始められ、各地に広がりを見せている『ぶれジョブ』という活動です。

障害を持つ子どもたちに週一回一時間、自分が生活する地域の企業で小さな職業体験の機会が提供されます。

主役は希望する子どもたち。家から送り出すのは家族。現場に付き添うのは地域住民。彼らを受け容れるのは地元企業。彼らと仕事を組み合わせるのは学校の先生。

いかなる制度にも頼らずに、参加者の無償の行為のみで支えられる「利益によらないつながり」です。

彼らを福祉サービスの対象 (object) としないがゆえに、あの「支援する／支援される」という二項対置の枠組みにとらわれることもありません。子どもたちを囲んで定例会を重ねる内に、周りの大人が変えられてゆくそうです。

半年続けてお互いに慣れ親しんだ頃、彼らは小さな別離を経験して、新たな出会いへと歩みを進めます。

発案者の西幸代さんは、この活動ではおたがいの立場に「手放す」「任せる」という姿勢が必要だと言われます。

貨幣的交換価値に支配される以前は、こうした大らかな信頼関係が地域社会に具えられていたのでしょうか。

決して他の夏とは並ばない夏が、もうすぐ終わります。

「核の平和利用」という言葉のまやかしが露呈された今、広島・長崎を記念する意味も、明らかに変容しました。

海の向うでは「ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ」と続く「ヒバクシャ」の歴史が、人々の記憶に刻まれています。

日本では、本当に何が起きているのかも公表せぬまま、戦後の経済的復興をモデルに「大震災からの復興」を叫ぶ声だけが喧しく響いています。取り返しのつかない事態の渦中に身を置きながらも、私たちはいまだに利潤と効率を追求する社会構造から抜け出すことができません。

セツシヨンの中心でかけがえのない通奏低音を奏でる子。ぶれジョブの中心で地域の大人同士を結び付ける子。

彼らのおのづから然りなる姿が、その弱さと傷つき易さを透して、私たちの採るべき道を示しています。



# ベラルーシの食卓

## 香草で変わるナスの味

今夏は、キュウリやトマト、ピーマン等の夏野菜を充分堪能した。猛暑からシトシト雨とめまぐるしく変化する夏だったが、実家の畑で、母は野菜の収穫に追われていた。例年、キュウリは3段階にタイムラグを作って成長させ、長期間食べられるようにするのだが、少し体調をくずした母は、今年はそれも叶わなかった、と悔やんでいた。

でも、ナスは、次から次へと実をつけ、ナス料理が続く毎日になってしまった。ナスは油と相性がいい。信州でも、お鍋いっぱい鉄火味噌（油味噌）は夏の定番だ。

グルジア料理にナスのくるみあえがあるが、ロシアのサラダコーナーに、ナスを炒め揚げして、サラダにした一品を見つけた。

### <材料 5人分>

ナス 2個・トマト 小1個・玉ねぎ 1/4個・ニンニク 1片  
ディルまたは万能ネギなど香草 適宜・クルミ 少々  
塩、コショウ 適宜・油 大さじ3

### <作り方>

1. ナスは大きめのさいの目切り、トマトもさいの目切り、玉ねぎはあらみじん切りにする。
2. クルミはローストし、あらみじん切りする。
3. フライパンに油を敷き、ナスを炒め揚げし、取り出して、塩小さじ1/2をまぶす。
4. ボウルにトマト、玉ねぎ、すりおろしたニンニク、塩・コショウ少々を入れ、混ぜ合わせる。
5. 4とナス、みじん切りにした香草を混ぜ合わせてに器に盛り、クルミを散らす。



# モスクワ便り



この夏、私はコロムナ市に旅行しました。コロムナはとても小さな街で、モスクワから南東に 100 キロ離れています。そこは、オカ川の岸边にあり、裕福な貴族が住んでいた古い家々が保存されている、とても面白く魅力的な街です。古代から 19 世紀に至るまで、コロムナは商業の中心地でした。

ロシアの至る所から、貴族達はモスクワと交易するために川に沿って往来しました。街はとても豊かで、たくさんの教会があり、いくつかの修道院、街を取り囲む城壁が保存されています。

モスクワの赤の広場には、16 世紀にタタールに対するロシア軍の勝利を祝して建てられた美しいワシリー寺院があると多くの方が聞いていますが、コロムナには、同じ理由でワシリー寺院より早く建てられた寺院があります。南東部からモスクワに戻る国王とロシア軍は、負傷兵の治療のためや、船で進軍中に亡くなった者を葬るためにコロムナに残りました。これらの戦いを記念して建てられた寺院は、小さいけれども、モスクワのワシリー寺院の兄とみなされています。

豊かな歴史以外に、この街には他のロシアの街とは違ったある特徴があります。すべてのロシアの子どもや大人が大好きな甘いもの、パステーラはここで作られたのです。パステーラは、リング、泡立てた卵白、砂糖から作ります。19 世紀まで、お砂糖はとても高かったので蜂蜜を使いました。コロムナには、キノコ、クルミ、様々な果物入りの数十種類のパステーラがあります。大きな製菓工場で作られた最近のパステーラは、味も形も伝統的なものとは変わってきました。しかし、近頃、コロムナで、生まれ故郷を愛する数人が、古いタイプの手作りのパステーラを作ることを決めました。彼らは、古文書の中から、パステーラの作り方と製造所が書かれているものを見つけ、小さな工場を開きました。同時に、とても面白く美味しいピクニックができる、パステーラ博物館を作りました。長いふわっとした 19 世紀の衣装を着た美しい女性が、古いインテリアが保存されている商家で観光客を迎えて、温かいお茶といろんなパステーラが乗ったお皿が置かれた丸いテーブルの向こうから話しかけてきます。女主人は、パステーラの様々な形の歴史について語り、いかに早くお客を惹きつけるか、どんな衣装、髪飾り、どんな色のペールをいかにまとうかについて語ります。私は、あたかも 19 世紀にいるかのような感覚に陥りました。

「日本からの観光客をここに案内できたらどんなに素晴らしいでしょう！」

今、コロムナはそのような場所のひとつです。

# 振替用紙のメッセージから



- ◎ お店のお客さんたちから集めた募金です。
- ◎ リフレッシュ子ども基金にご使用下さい。
- （\*「ふくしまっ子の夏休み」検診へのご寄付とさせていただきます）
- ◎ 震災支援チャリティコンサートで募金して頂いたお金です。お役立て下さい。
- ◎ 少額で心苦しいですが、チリも積もればです。
- ◎ 皆様、本当にお疲れさまです。これからも末長く応援しましょう。
- ◎ 最も心配な放射線被害に医師の支援は心強い。そこに私が応援できて光栄です。
- ◎ プルトニウムの語源がギリシャ神話の冥界の王プルトからきていると知り、愕然としました。人の手に負えるものでない！
- ◎ 障がいのある子どもを育てている親としては、元気に生まれた子ども達には元気に成人して欲しいと願う。
- ◎ 南相馬出身です。いつもありがとうございます。
- ◎ 放射能は福島原発建設当時から拡散していたのではないですか。3・11以前から放射能値を測定検出していても公表しなかっただけではないでしょうか。国と東電は、ありのままに事実を公表すべきです。
- ◎ 平安な日々が早く戻りますように。
- ◎ 少しずつですが応援続けます。
- ◎ 原発に目を向けてこなかった責任を感じています。
- ◎ 募金を福島原発被災者支援に直接役立てて頂けるのはどこよりもJCF！
- ◎ 高木仁三郎著「新装版チエルノブイリ原発事故」を読みたいと思います。
- ◎ 8月21日の「あげまつ元気市」の売上の一部とカンパを寄付します。
- ◎ 二人目を妊娠しました。無事出産を祈ってカンパします。
- ◎ 福島の現実を目の当たりにして昨日

人の身、今日は我が身の思いです。わずかの金額ですが少しでもお役に立てればと思います。

◎海外に住んでおり、帰国時にしか寄付できませんがお役立て下さい。

◎リカ先生と神谷さんの報告会で現地レポートを聴くことができました。JCFイラク支援に息長い支援をしてゆきたいです。

◎今は少額を寄付することでしか支援できません。皆様お身体をどうかご自愛下さい。

◎ふるさとが福島県境の小さな町（丸岡町）なので心配しています。

◎活動ありがとうございます。私も、もうじき3才と5カ月の孫がいます。地球全体が放射能の心配のない心豊かな星になるように祈っています。



# 食品放射能検査機器を購入

宮ノ尾秀彦（事務局）



皆様からの温かいご支援によって、「食品放射能検査機器」を購入することができました。本当にありがとうございます。

現在日本では、各自治体や地域ごとの空間線量値（毎時）を計測し、その値を基準に年間被曝量というものを算出しています。この年間被曝量が年間許容放射線量の基準を越えるかどうかという判断のもと、避難区域の指定・指示、そして除染等を行っています。この年間許容量の基準は、事故前は年間1ミリシーベルト以下でしたが、事故後急に子どもでさえも年間20ミリシーベルト以下という基準に変更されました。今でもこの年間20ミリシーベルト以下という基準は変わっていませんが、年間1ミリシーベルト以下を目指す、文部科学省の姿勢は変化してきています。

この年間許容量の値はICRP（国際放射線防護委員会）の基準を根拠としていますが、このICRPの基準は外部被曝量だけでなく内部被曝量も含んだ上での値です。しかし文部科学省では内部被曝量についてはその影響が全体の5%に届かないとして、年間許容量の評価は外部被曝のみによって行うと決定しました。しかし本当に内部被曝の影響は無視できる範囲なのでしょうか。

内部被曝というのは呼吸による放射性物質の吸入、皮膚や傷口についた放射性物質の吸収、そして汚染された食物や飲料水の摂取等によって身体に取り込まれた放射性物質から直接被曝することを言います。吸入による内部被曝に関しては、3月の福島第一原発でのドライイベントの実施や水素爆発直後は、非常に注意しなければいけない状況でした。しかし今はそれほど心配する状況にはないと思われまます（原発事故が収束に向けて安定している事が前提ですが）。また、よほど汚染されたものを素手等で扱わないかぎり、皮膚からの吸収による内部被曝も、ほとんど心配する必要は無いでしょう。

しかし食物や飲料水からの内部被曝に関しては、セシウム137の30年という半減期を考えると、長期間、そして広い地域での注意が必要です。また私たちは食物連鎖の頂点にいるという事実からも、放射性物質の生物濃縮による内部被曝の影響は大きいと考えなければなりません。

4月に茨城県沖で採れたコウナゴから、高濃度の放射性ヨウ素が検出されました。また7月には福島県産の牛肉を皮切りに、多くの地域で育てられた牛肉から放射セシウムが検出され大きな問題になりました。この牛肉の汚染は、

飼料である稲わらの流通が媒介して各地に広がり、その牛肉が出荷流通される事により影響は日本全国（47都道府県すべて）に及びました。その後各地のお茶の葉からの検出、そして汚染された腐葉土の流通なども問題となりました。食の安全を考えると、すべての食品について検査を行う事が必要だと考えられますが、物理的には不可能でしょう。また検査できたとしても、国の定めた暫定基準値という数値に合理性があるのかといった判断は非常に難しいと思われまます。

食の安全を確保し、子どもたちを内部被曝から守っていく。そのためにはまずは現状を知るという事が必要です。そこでJCFでは「食品放射能検査機器」を購入して、食品、水（水道水・井戸水など）、田畑の土などの放射能測定を開始しました。今現在はテスト運用中ですが、産地別の同品目に関する検査、井戸水の継続的検査、土壌については表土と地下部分の土の検査などを行っていく予定です。検査することによって食品の汚染状況を明らかにすることが、無責任な風評被害を防ぐことにもつながると考えています。

今回テストサンプルとして検査したある地域の田んぼ

の土に関して、その表土からセシウム134とセシウム137が検出されました。しかし表土から5cmから10cm下の土からは、どちらの放射能も検出されませんでした。より詳細な調査と多くの検体を検査してみなければ断言はできませんが、この結果から考えると田んぼのような粘土質の土壌の場合、耕す前に表土から5cm下までの土を除去すれば、次年度以降は安全なお米が栽培できるという事を意味しています。検査することによって、この様な将来に向けた良い事象も探し出せたらと思っています。

実害のある食品は口にしない、そして絶対子どもたち口にさせないという事はとても大切です。しかし例えばその作物を作った農家の方、牛を育てた畜産家の方、魚を獲った漁師の方たちには何の責任もありません。JCFの行う「食品放射能検査機器」導入による支援は、消費する側だけでなく生産する側にとっても意味のある活動にしなければなりません。私たちすべての大人は日本に生きる子どもたちの未来のために、将来にわたって食の安全を担保していかねばならないと思います。

JCFでは今後皆様からの調査依頼も受付けていきます。近々ブランドゼロやホームページ上で、その依頼方法

や検査結果等についてご報告できると思います。

### 「福島原発震災の被災者支援募金」のお願い

JCFでは被災地支援のため募金募集を行っております。

募金開始から9月末日までに38,596,670円のご寄付が集まりました。たくさんの応援をありがとうございます。

頂いたご寄付は、引き続き、ガラスバッジプロジェクト諸経費・線量率計購入経費、被災地や避難された子どもさんの健康診断プロジェクト、食品放射能検査機器購入等に充てて参ります。

以下の郵便振替口座に「震災支援」とご記入下さい。

口座番号：00560-5-43020

口座名：日本チェルノブイリ連帯基金

連絡欄：震災支援

インターネット銀行および他金融機関からの振込用口座番号

059（ゼロゴキユウ）店（059）

当座 0043020

# Здравствуйте!

## 「ピアニストの兵隊さん」

横内香苗（事務局）



初めまして。6月から新しくJCFスタッフとしてお世話になっております横内香苗と申します。

数年前、日本の「憲法9条」の素晴らしさに気づかされ、世界4カ国語に訳したポストカードを作り、広めています。5月にJCFで開いた東海村臨界事故を経験された谷田部裕子さんのお話を聞く会を企画した事がご縁となり、この度JCFで働かせていただく事になりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私のお勧めする絵本『ピアニストの兵隊さん』を紹介したいと思います。著者の古畑博子さんは、上高地の入り口である松本市波田、新島々駅の西でカフェギャラリー「カフェ・ブレイエル」を営み、店内には長崎の永井隆医師が病床に伏した後に交流した版画家の、加藤大道の作品が常設されています。私が丸木俊さんの版画を持参しカフェを訪れた事がきっかけで古畑さんと出会いました。

この絵本は現在87歳になる古畑絢子さん（博子さんのお母様）が中野市で新任教師として赴任した小学校での実話を元に書かれた絵本です。昭和19年、大本営を東京から長野県松代に移すため巨大地下壕の工事が行われた当時、中野市平岡の十三崖じゅうさんがけにも武器、弾薬を貯蔵する地下壕が作られました。国民学校の絢子先生も教え子と共に慣れない畑での勤労奉仕や軍事訓練の毎日。やがて平岡でも空襲警報

# こんにちは！



「ピアニストの兵隊さん」

著者：古畑博子

絵：野中秀司

発行：郷土出版社

定価：1680円（税込）

のサイレンが鳴るようになり、8月6日広島、9日長崎での原爆投下となります。

戦中校舎の半分が日本軍の兵隊宿舎だったので戦後はアメリカの進駐軍の宿舎となり、アメリカ兵は十三崖に残された武器の処分や学校で使われた竹やりや軍歌のレコードまで焼却処分を行いました。そんなある日、音楽室にアメリカ兵がやって来て「ピアノヒカセテクダサイ」と絢子先生に話しかけてきました。鍵盤に手を置き弾き始めた曲はショパンの「ノクターン」。ピアノ演奏を通じたアメリカ兵と子ども達の交流はその年のクリスマスまで続きました。言葉を超え、敵国と交流した当時の子どもや教師とアメリカ兵の素直な気持ちを想像します。子ども達に戦争の事実を伝えると共に大人にも読んで頂きたい一冊です。

先号のグラントゼロでも紹介したチェコご出身のチェロ奏者、ヴラダン・コチさんは兵役を拒否したために捕えられた経験があります。信念を貫き争いを拒みました。現在世界中でチェロを奏でて、平和を訴えています。9月初旬の来日の際は福島まで足を運び、演奏する事で被災者を癒しました。

人間はその手で銃を持つのか、愛を与えるのか？ コチさんも『ピアニストの兵隊さん』と同じく、今の私たちにメッセージを投げかけてくれます。

## 福島原発の闇

堀江邦夫、水木しげる



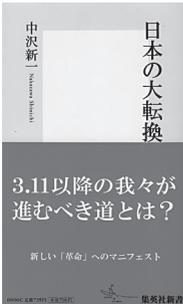
福島原発の闇  
——原発下請け労働者の現実  
文：堀江邦夫  
絵：水木しげる  
発行：朝日新聞出版  
定価：1000円＋税

Book

本書は、1979年に『アサヒグラフ』に掲載された、福島第一原発における下請け労働の体験ルポ（原題「パイプの森の放浪者」）を編集し直し単行本化したもの。原発下請け労働の苛酷な作業現場の実態を、原発内部の闇や恐怖を実感させられるイラストとともに明らかにしている。

## 日本の大転換

中沢新一



日本の大転換（集英社新書）  
著者：中沢新一  
発行：集英社  
定価：700円＋税

Book

（3・11）以降、日本は根底からの転換をとげていかなければならなくなった。原子力という生態圏外的テクノロジーからの離脱と、「エネルギーロジ」（エネルギーの存在論）という新しい概念を考えることで、これからのわたしたちの目指すべき道を指し示す。新しい「革命」へのマニフェスト。

## プロテスト・ソング・クロニクル

——反原発から反差別まで



＜ミュージック・マガジン 8月増刊号＞  
プロテスト・ソング・クロニクル  
——反原発から反差別まで  
発行：ミュージック・マガジン  
定価：1500円（税込）

Book

（3・11）以降、日本でもプロテスト・ソング（反体制的な主張や抗議を歌詞に取り入れた歌）が、ユーチューブやサウンド・デモなどで身近に感じられるようになってきた。本書は古今東西のプロテスト・ソングを厳選し、反原発・反核、反戦・平和など、カテゴリーに分類して年代順に紹介している。

## タッシリ ティナリウエン



「タッシリ」  
ティナリウエン  
発売：ライス・レコード  
定価：2940 円（税込）

CD  
今年のフジ・ロック・フェスティバルにも出演した（砂漠のブルース）の代表格バンド、ティナリウエンの最新作。前作までのエレキギターからアコースティックギターを基本とするサウンドに換え、彼ら自身の音楽のルーツへの回帰が伺える。アルジェリア南部の砂漠の洞窟状の場所で現地録音された。

## エネルギア コスモノウティクス



「エネルギア」  
コスモノウティクス  
発売：アオラ・コーポレーション  
定価：2520 円（税込）

CD  
ドイツ・ベルリン在住のロシア系移民のバンド、コスモノウティクスのデビュー作。リードヴォーカル&バラライカ、ヴァイオリン、ダブルベース・バラライカ、ドラムの4人からなり、自ら「ロシアン・バラライカ・スピードフォーク」と称し、独自のワールド・ミクスチャー・サウンドを生み出している。

## カスバ広場からタハリール広場へ ～夢は我らの武器



「カスバ広場から  
タハリール広場へ  
～夢は我らの武器」  
発売：ライス・レコード  
定価：2625 円（税込）

CD  
今年1月から2月にかけて起きたチュニジアのいわゆる「ジャスミン革命」と、それに続くエジプトの反政府運動によるムバラク政権崩壊。両者の革命前後に生まれ、ユーチューブなどインターネット上で人々に聴かれた反政府運動に呼応する音楽を集めた「革命のサウンドトラック」。

# Information

## 日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広がりました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

3月11日以降、東日本大震災、そして福島第一原発の事故により、東北地方のみならず広大な範囲で放射線災禍を受けました。JCFは、3月から、緊急支援、外部被曝線量測定、子ども達の診察プロジェクトを行ってきました。今後、環境線量測定や食品汚染測定など、子ども達を被曝から守るために活動を続けます。



### ◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

### ◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 89 号

発行日 2011年9月26日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 樫野ひかり

小林裕子

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

宮ノ尾秀彦

横内香苗

協力 寺島仁美

J I M-N E T

加藤丈典

風樹 光

印刷 電算印刷

#### ■編集後記

今号には報告が間に合わなかったが、看護師で助産師をめざして勉強中の国井理事が、9月20日ベラルーシに向けて出発した。ベトカ地区診療所や埋葬の村での聞き取り調査、またゴメリ州立病院附属産院への生化学分析器試薬支援、環境センターへ協和発酵キリンから寄付された G-CSF (がんの化学療法時等に使用) を届けた。福島原発事故が終息していない今、ベラルーシへの支援訪問団派遣は、今までとは違う感慨がある。被曝や除染の実際を学びたいという切実な思いを背負って渡航した国井さんの報告を待ちたい！

(布山)

## 販売物紹介

### Book

・「チェルノブイリからの伝言」

J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

### CD

・「小室等／ベラルーシの少女」

(8cm シングル盤) 1000 円

◆がんばらないレーベルCD

・「ヴラダン・コチ／ふるさと」

2500 円

・「坂田明／ひまわり」

2500 円

・「坂田明／おむすび」

2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

\* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

#### ●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

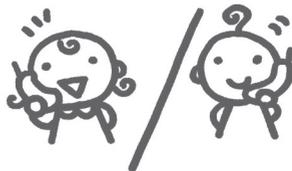
〒 390-0303

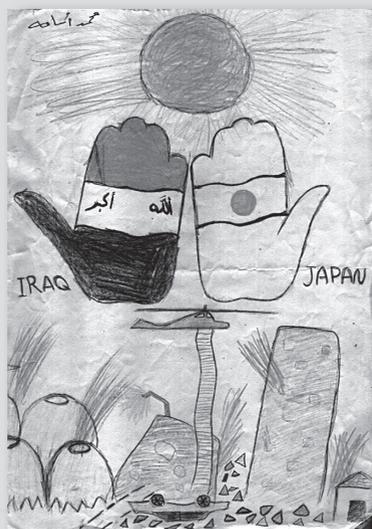
長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website <http://jcf.ne.jp>





## ムハンマッド君 バグダード

バグダードの小児ガンの子どもが描いたという  
津波の絵をもらった。

日本の援助をうけている患者たちは、  
日本のことを良く知っている。

ニュースを見てみんなびっくりしたという。  
みんな、日本のために何かしたいと思い、  
絵を描いてくれたそうだ。

イラク政府も8億円の義援金を出すと  
いう。  
ありがとう。